
プリズムレイン

章久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリズムレイン

【Nコード】

N0262W

【作者名】

章久

【あらすじ】

本格ミステリー小説です。

第1章 終焉

1

町田康夫は、自宅にしている日本橋浜町のワンルームマンションが見えたところで、短くなったセブンスターを地面に放り投げた。雨上がりの湿ったアスファルトに、吸殻の火が一瞬にして消えた。夜明け前の頭上の空はどんよりしていたが、遠くの空では雲の隙間から白々と明るい夏の空が見え始めていた。

午前四時三十分を少し過ぎた初夏の夜明けだった。からだ全体がだるかった。明け方まで仕事をして、その上職場から四十分近くも歩いてきたのだ。それも当然だった。

だが、不思議なことに頭の中はすっきりしていた。はつきりと覚醒している。眠気は全く感じていない。その理由も康夫はわかっていた。

昨日は康夫にとって、小さな、ほんの小さな喜びの積み重ねだった。そして、充実した一日だったと感じている。だからこそ、頭は覚醒していたのだ。

康夫は疲労で重くなった足を引きずるようにして、残り僅かな距離を急ぐことなく歩いていった。

明治座の前を過ぎて、次の交差点を左に曲がった所に自宅マンションがある。十階建ての、赤茶色の築十年のワンルームマンションだ。

遠くで、朝刊を配るバイクの音がしている。人気はなかった。国道を走る車の数は少ない。

気温が徐々に上がり始めているらしく、地面の湿り気が靄のように空気中に上がり始めていた。

また暑い一日が始まるうとしていた。

康夫が住居を日本橋浜町にしたのに特別な理由はない。

今の仕事に就いたのが一年前。先輩社員に、手ごろで勤め先からも近いこの地を教わった。

二十二平米のバストイレ付き賃貸マンション。家賃は、管理費込みで十一万だが、勤めている会社が五万円補助してくれているので、康夫の負担は六万に過ぎない。二十二平米は、一人暮らしには十分な広さと言えた。その上、康夫の部屋には見事なまでに何も無い。あるのは小さな冷蔵庫と洗濯機、百七十センチの康夫が真っ直ぐ寝るには少し短いソファベッドがあるだけだった。

極めて質素な生活。決して金に困窮しているわけではなかったが、康夫は無駄を一切省いた生活を送っていた。

夜間に仕事をしていて、昼間はほとんど寝て過ごしているので、光熱費も基本料に近い金額しかかかっていない。だからテレビすら置いていない。食費といえば、夕食は勤め先で軽食が取れる。仕事が終わった後に、時々食べて帰るラーメン代と、起きた時に食べる簡単な食事、例えばカップラーメンやレトルト食品などが、そのくらいなのでそれほど負担はない。菓子類は一切食べなかったし、自分で料理するわけではなかった。食材や調味料がキッチンに散在していることもなかった。酒も率先して飲み歩く方ではなかったし、風呂上りに飲むか、こうして帰宅時に歩きながら飲む缶ビールくらいである。しかも、三百五十ミリを一本だけで満足してしまうほど酒は強くなかった。毎日飲むわけではなかったし、大抵は発泡酒だから、一回に払う金額は百五十円前後である。つまり、ほとんど酒代が負担になることはなかった。ひと月で一番出費しているのは、一日一箱程度の煙草代かもしれない。

勿論新聞など読まないし、特に購読している週刊誌などもない。女友達がいるわけではないのでデート代も皆無に等しい。これといって金のかかる趣味があるわけではないので、手取り二十万の給料でも、十分に残る生活だった。

マンションのエントランスはオートロック式になっている。キッ

チンはミニキッチンだが、バスとトイレは別だったし、洗濯機も部屋の中に置けるスペースがある。康夫にとって申し分ない住まいだった。

勿論、二十二歳の康夫が、最初からこんな贅沢ができたわけではなかった。

康夫は立ち止まって、一度大きく息を吐いた。若いとはいえ四十分の道のりを歩いてくるのはやはり疲れる。

店を出た午前三時過ぎには土砂降りの雨だった。ちょっとした野暮用を済ませて、傘もささずに帰宅の途についたのが午前三時四十分過ぎだった。

現在の康夫の仕事は、銀座にある高級クラブ「シエル・カルダン」の黒服と呼ばれている従業員である。十二時に店が閉店したあと、終電のなくなったホステスを、送りと言われている送迎を店の専用車で行う。たいていは、ホステス同士遊んで帰る者、客とアフターする者、電車で急いで帰る者などで、送りをするホステスは、二、三名程度である。送り先は、埼玉の浦和とか川越などで、送った後店に車を返し、生ごみを店の前に出して家路につく。

この仕事を康夫の他三人の黒服で行っている。

住んでいるマンションの近くに車を止める場所があれば、店の車で帰ることも許されているが、夕方まで寝ている康夫にとって、自宅付近に車を駐車させておく場所はなかった。

店からタクシー代が支給されることはない。だから、四十分近くかけてゆつくりと歩いて帰宅する。

ゆつくりと、タバコを吸いながら、時には缶ビールを飲みながら、徒歩で帰宅するのが、最近の康夫の習慣になっている。

それは別に苦痛ではなく、むしろ楽しみでもあった。

仕事を終えて、土砂降りの雨の中を、傘もささずにここまで歩いてきた。

雨はもうあがっている。白い開襟シャツが、全ての汚れを洗い流してくれるように、びしょ濡れになり、そして、夏の陽気で乾きつ

つあった。

今日はいつもより二時間近く遅い帰宅だった。閉店直前に来た、横山忠雄という常連客の所為だった。

普通の客なら、例えば常連でも閉店間際の来店は断るのだが、彼だけは店にとって特別な存在だった。

詳しいことはわからないが、従業員五十人ほどの建築設計事務所の社長らしい。オーナーの知り合いということもあるが、横山は、このご時世に毎月店に数百万の接待費を落としてくれる上客だったのだ。

無碍にはできない存在なのである。

客がいる以上、ホステスと黒服は帰れない。これは当たり前のことだった。指名された二人のホステスが犠牲になった。そして康夫が店の最後を任された。

こういう時のマネージャーやママはあてにならない。ママは常連とアフターに出てしまった。マネージャーは火の元と戸締りをうるさいほど執拗に注意をしてから、金庫の中身を持って貸し金庫に向かって行った。

さだ吉と呼ばれている定岡吉生という小柄な黒服が、二人のホステスの送りをするために十二時すぎに帰っていった。

残されたのは、最後に伝票を切る主任と康夫、そして那美とルリという二人のホステスだった。

結局横山は二時過ぎまで店にいて、そのあと那美とルリを連れて出て行った。おおかた焼肉屋がカラオケでも行ったのであろう。

二人のホステスも満更ではなさそうだった。ホステスという人種はやっぱ金で動くのだと、康夫は半ば呆れながらも男として惹かれていたわけではない横山に同情せずにはいらなかった。

康夫は、汗と雨に乾ききっていない解禁シャツを、不快そうにパタパタさせながら、目の前の自宅に向かって足を速めはじめた。

家に着いたら、エアコンを入れて、まずシャワーだ・・・

そして缶ビールを一本飲んで、そのまま泥のように気の済むまで

眠る。

眠ることに飽きる午後五時過ぎに起きて、再びさっきの職場に出勤する。いつもと変わらない過ごし方だ。

そして毎日少しも変わらない生活の繰り返しだった。

康夫はふと立ち止まって一点を見つめた。自宅は目の前だった。眩しそうに目を細めて上を見上げる。

限りなく黒に近い、厚く垂れ込める雲の隙間から、一筋の光が康夫の頭上に射したのだ。それはまるで、舞台の上の主役がスポットライトを浴びて一人見せ場で歌い、観客を魅了しているかのような気分になった。

オレにも運が向いてきた・・・

光が当たる人生がやってきた・・・

康夫は疲れも忘れてしばし光に照らされていた。

この光は希望と夢と、そして康夫の未来を与えてくれる。そんな輝きに思えたのである。

今までの苦勞と苦惱が報われる、康夫はそう感じた。

今年二十二歳になった康夫は、四年前に高校を卒業すると同時に、青森の片田舎から上京した。

まだ雪の残る三月の中旬である。

農業を営む両親と、それを手伝う祖父母、そして五人兄弟の二番目に生まれた康夫は、姉の結婚が自分の将来を決めてしまおうと思い込んで、姉が結婚する前に家を飛び出して上京したのだ。

康夫は農業が嫌いだった。自分にはもっと華やかな人生が相応しい、そう信じていた。だから、長男の康夫は、姉が嫁ぐと家を継がされろと思ひ、何の目的もなく、逃げるようにして上京した。

やりたいことがあるわけでもなく、親父のように農業で終わりのないという、ただそれだけの理由で、康夫は故郷を捨てたのである。

康夫は、自分でも自覚しているほど人見知りが激しかった。初対面の人と話すと、赤面は勿論、異常なまでのどもりが出てしまう。

東京で一人で生きていけるのだろうか・・・そういう不安がないわけではなかった。だが、もう後戻りはできない。

上野駅に降り立ったとき、よく酔った親父が歌っていた「ああ、上野駅」の歌詞を思い出して感傷にふけたのを今でも覚えている。右も左もわからない。何をしたいのかもわからなかった。

お袋が密かに貯めていたへそくりの三十万を拝借してきた。これがなくなる前に、とりあえず仕事とねぐらを確保しなければならな
いと思った。

上野駅周辺をふらふらと歩き回った。自分に出来そうな仕事を探すために。

そして見つけた。身元のしっかりしていない、住所不定の康夫でも雇って貰える仕事だ。そして住み込みで生活も保障される職場が、風俗店である。

風俗店なら身元のしっかりしていない康夫でも働けるに違いないと思った。割と小奇麗にしているソープランドの入り口を入るとき、康夫は墮落の道に歩き出すのではないかという不安感に襲われた。

だが、他には考えられない。ここは度胸を決めるしかなかった。履歴書もなく、汚れたジャンパー姿の康夫が、よく就職できたと今でも不思議に思う。

そして憧れの東京暮らしが始まったのである。

最初の数ヶ月は、東京の人の多さと、物価の高さと、人間の冷たさに驚き、失望し、何度も青森に帰ろうかと思った。だが、ここで帰れば、地元では笑いものになる。そして、また何もない退屈な田舎暮らしが始まるのだ。

東京で成功してやる。

どういう成功なのかはわからない。人生に目的や夢があるわけでもない。

だが、今度地元に戻るときは、絶対英雄として凱旋帰省してやると心に決めていた。

あのときに耐えていたからこそ、今の自分がいると思っている。

今は小さい高級クラブの、黒服と呼ばれるウェ이터がもしれな
いが、このままでは終わらないという決意だけは、強く持ち続けて
いた。

上京直後は、ソーブランドの呼び込みを上野で月給十五万円と四
畳半のアパート付きで始めた。

ソーブランドという商売があること自体、実は初めて知ったのだ。
康夫は、真面目に働いた。というより、世間知らずの康夫にとつ
て、東京で遊ぶということすら知らなかったのである。

三ヶ月ほど、店の入り口で呼び込みをやらされた。その後、店内
に入つての接客をした。接客といつても、待合室で順番を待つ客に、
飲み物やおしぼりを出し、また、フリーで訪れた客に対して、ソー
嬢の写真を見せて、指名を取る仕事だった。

それでも、康夫にとっては新鮮そのものだった。

人見知りの激しい康夫は黙々と働いた。

やがて、同僚とも打ち解けて、仕事の後に飲みに行ったり、休み
にはパチンコや競馬に付き添うようになった。

彼の、仕事熱心な姿勢が功を奏し、半年後には主任という肩書き
を貰い、給料も十八万と少し増えた。

その頃になると、店の女の子からも話しかけられるようになり、
同じ東北から出てきてソー嬢になった同じ年の洋子と親しくなっ
た。

洋子も岩手の片田舎から、希望を持って東京に出てきた一人だっ
た。有楽町で有名デパートの店員をしていた洋子は、田舎者という
ことで、数多くの嫌がらせと虐めにあった。上司からはセクハラ紛
いなことまでされ、毎日泣きながら過ごしたこともあったらしい。
デパートを我慢できずに退職しても、次の仕事が見つからなかつ
たという。康夫と同様、田舎には絶対帰らないと決めていた洋子は、
上野の小さなソーブランドを第二の職場に選んだらしい。

四畳半の、店が借りてくれているアパートから、六畳のアパート
に引っ越した頃、洋子と肉体関係を持つようになっていた。

最初は、同じ田舎者ということで相談相手としてよく夢を語り合った。洋子は同じソーブ嬢から虐めに合ったりもしていたらしいが、康夫が慰め、愚痴を聞いてやっていたので、どうにか辞めずに続けられていた。

そして、自然の流れのまま肉体関係を持つようになっていた。

店の従業員が、商品ともいえるソーブ嬢と恋愛関係や肉体関係になることはご法度だったのだが、康夫にとっては、そんな規則も忘れてしまうほど、洋子にのめりこんでいった。

そんな康夫の態度に、店が気づかないわけがなく、働き始めて一度一年が過ぎた頃、突然解雇を言い渡された。

洋子は、そこそこの指名が取れるソーブ嬢だったので、康夫を切ることで店が動いたのだ。

康夫は洋子と離れなくてはならなくなったのだ。そして、康夫は無職になり、職探しをしなければならぬ羽目になった。

そんなとき新橋駅で、クラブホステスにならないかとスカウトされた、洋子が康夫に話した。ソーブランドのハードな激務に疲れ、その上よき理解者だった康夫と離された洋子にとって、この話は渡りに船だったらしい。

洋子は康夫に二人で移籍しないかと持ち込んだ。

洋子は、ホステスとして、その店で働くこと条件として、康夫を黒服として雇うように申し出てくれた。

康夫にとって異論はない。洋子と引き離されようとしているときに、洋子と一緒に働けるのだから異議があるわけはなかった。

店側にも異論はなかったが、やはりホステスと従業員がつきあうのはご法度だったので、かなり制限を厳しくした上で承諾したのだ。洋子と康夫は、同時に銀座の「シエル・カルダン」というクラブに入店した。

二人とも風俗から足を洗うことになったのだ。

康夫にとって、彼女と共に移籍した今の店は、ソーブランドの呼び込みをしていた時よりずっといい生活だった。

収入も、住まいもランクが上がった。

その頃には極度の人見知りも治っていた。

自分にも運が向いてきたと思った。成功への第一歩が始まったと感じた。

だが、現実はその甘くなかった。

自分が何で成功したいのかわからないまま、二年が経過した。現在でも、自分が何をしたいのか、発見できていない。

今の職場には満足している。

銀座の高級クラブは、常連客も一流ばかりだし、チップもそれなりに弾んでくれる。

ホステスも美人が多く、華やかで妖艶だった。もともと、ホステスが自分のような黒服を相手にしてくれるわけはなく、挨拶されればいい方で、ほとんど口もきいてくれない存在だったが、それでも康夫は満足していた。

そんな中で、ホステスの洋子だけは、昔からの知り合いでもあり、自分に悩みを打ち明けてくれたり、プライベートで食事をしたりもしていた。

回数こそ減ったが肉体関係は続いていた。

だから、康夫は洋子を自分の彼女だと信じていたのである。

その洋子が、移籍してから二年たった先月、自分に黙って店を辞めたのを知ったとき、康夫は自分が裏切られたことと、既に洋子の心に自分が存在していないことを知って、動揺を隠せなかった。

洋子が店を辞めてどこへ行ったのか、何をしているのか康夫にはわからなかった。洋子から教えられていた携帯電話の番号も、勿論メールアドレスも変更されていたし、洋子が住んでいた目黒のマンションも引越されていた。

康夫に黙っての計画的な離別だった。

マンションの仲介屋に行き先を教えて貰おうと訪ねたが、そこで洋子という名が偽名だったことを知り、大きな衝撃を受けた。つまり洋子が住んでいた目黒のマンションの契約者の名前は洋子ではな

かつたのである。

勿論ほんとの名前を覚えてくれるはずもなく、また引越し先が仲介屋にわかるはずもなく、何もわからないまま、洋子は康夫の前から忽然と消えたのである。

噂では、常連客の愛人になってかこわれていると聞いたこともあるが、真実はわからなかった。

自分に何も告げずに去って行った。

体の関係もあった、いわば恋人だと思っていた相手に裏切られた。別れの言葉も、挨拶もなく、自分は置き去りにされた。

あれだけ洋子に協力したのに・・・

あれだけ洋子のために尽くしたのに・・・

康夫は、洋子に失恋したことよりも、洋子に利用されていた自分のふがいなさと、洋子への憎悪で一杯になった。

この借りはきつと返す・・・

愛情が憎悪に変わった瞬間だったかもしれない。

康夫は、そう決断すると、ひたすら洋子の行方を追った。もしかしたら移籍したのかもしれないと思い、移籍先を探すことに全力を注いだ。

洋子の常連客で、洋子が辞めてから店にこなくなった客で、しかも愛人を囲いそうな金持ちを探し、密かに追いかけてみた。

洋子と親しくしていたホステスにも聞いた。が、収穫はまったくなかった。

洋子は煙のように康夫の前から、そして銀座から消えてしまったのである。

徐々に洋子への憎悪が消えかけていったある日、偶然康夫は洋子を見かけることになる。

いつものように店に向かっていた康夫は、電通通りを徐行しているベンツの助手席に、運転席の男に凭れかかるように微笑んでいる洋子を見かけた。

康夫の感情に再び憎悪という熱い思いが沸き起こった。

金になびいた洋子。人をさんざん利用して、ぼろ雑巾のように捨てて行った洋子。あれだけ協力してやったのに、恩を仇で返した洋子。

決して許せない、許してはいけない。

康夫は走った。死に物狂いで走って、ベントを追いかけた。

やがてベントは路上に停車し、四十代と思われる男と洋子は、ベントから降りると銀座日航ホテルへと吸い込まれていった。

康夫の体の中で血が逆流し、嫉妬心と憎悪が再び燃え上がっていった。

洋子は誰にも渡さない。洋子はオレのものだ。

洋子がオレのもとへ戻らないというのなら殺すしかない・・・

相手の男も一緒に葬ってやる・・・

康夫は、洋子が乗っていたベントのナンバープレートを抑え、ホテルのロビーへと急いだ。

康夫は夢から醒めたように歩き始めた。疲れを癒してくれる城、我が家は目の前だった。

康夫は、大きく溜め息を吐いて、自宅の鍵を取り出そうと、ジープンのポケットを探り始めた。

ようやく引つ張り出した鍵で、エントランスのドアを開ける。静かな音とともに自動ドアが開いた。

康夫はゆっくりと重い足を引き摺るように二階に上がり、自分の部屋の前まで辿り着いた。

疲労感と、虚脱感だけが、康夫の体を包み込んでいた。目的を成し遂げた充実感は消えていた。我が家を前に、倦怠感だけが身体を支配していた。

寝よう。気の済むまで眠ろう。

目の前に自分の寝るだけの空間が迫っていた。

こんなことをいつまで繰り返すのだろう・・・

康夫は、自分のねぐらを目の前にして、いつものように失望感と、脱力感と、そして寂しさを全身に感じていた。

マンションのドアには表札がぶらさがっている。昔、店に黙って洋子と同棲を始めようと決意して購入した表札で、町田康夫の下に洋子と可愛い字で書かれてあった。

結局、それは虚しい夢で終わったのだが。

康夫は洋子の昔いつも自分に向けられていた笑顔と、ついこの前自分を見て驚愕していた恐怖心に満ちた表情を思い浮かべた。

再び洋子は自分ひとりのものになった。だが、以前のような関係に戻ることは二度となかった。

それでもよかった。洋子が他の男に取られないだけでも、康夫にとっては満足だった。

それなのに、この虚しい気持ちは何だろうか、満たされない疎外感是一体どうして感じるのだろうか・・・

康夫は鍵穴にキーを入れて静かに廻した。

「町田さん・・・？」

ふいに背後から声がかかり、驚いて振り返った。

その瞬間、左の胸の辺りに衝撃が走った。

その衝撃の原因を確認する暇もなく、こみ上げてくる激痛にかられて、苦しそうに咳き込んだ。

視界に見覚えがある男の顔が映り、何かを言おうと口を動かしたが、言葉にはならなかった。

頭の中で、ようやく自分が刺された理由がおぼろげながらわかってきたときには、既に遅かったのだ。

次の瞬間、心臓が驚掴みにされて、取り出されたように刃物が抜かれ、赤黒い血が噴きだした。

更に強い力で、もう一度同じ場所に刃物が刺し込まれたのを、失われる感覚の中で認識した。

痛みはもう感じなかった。

薄れゆく意識の中で、澄んだ空気と、どこまでも青い空と、限り

なく透明な冷たい川のせせらぎを感じたような気がした。

遠くで洋子が微笑んでいた。手を伸ばして洋子を掴もうとしたが、洋子は微笑みながら遠ざかって行った。

ま、待つて・・・

康夫は心の中で洋子に叫んでいたが、洋子の表情は苦痛に満ちた醜い顔に変わり、康夫を罵りながら康夫の視界から消えていった。

康夫は、右手で空気を掴むように漂わせながら、その場に倒れ込んでいった。

マンションの冷たい廊下のコンクリートが、頬に冷たく感じたのは一瞬のことだった。

康夫は、そのまま二度と故郷に錦を飾ることなく、この世を去ったのである。

ひしめき合って立ち並ぶ雑居ビルの通用口から、一歩足を踏み出すと、サウナの中にいるような熱い空気がからだ全体を包み、小谷尚子は顔をしかめた。

背後で、通用口の扉が静かに閉まり、カチリとロックがかかる音がした。

長い時間、冷房のきいた室内にいた所為で、体が初夏の空気を忘れていたのだ。

首筋に早速じわりと汗が浮かび上がる。

尚子は、建物と建物の間の、建築基準法などまるで無視するかのような狭い路地にいた。路地というより、隙間といった方が正解かもしれない。

こんなところに通用口を造るなんて・・・
ここを出るたびにいつも思う。

尚子は歩き出す前に、視界を安定させようと暗闇に目を細めた。暗闇に目が慣れないまま、ゆっくりと歩き出した。ブランドもののワンピースが擦れないように気を遣いながら、十メートルほど先の出口に向かう。

例年より早い梅雨明けに、幾分不快な思いを持ちながらも、今年こそ、新しい水着を買おうなどと考えながら、尚子は疲れたからだを引きずるように進んだ。

こんな時間まで仕事をする自分は、本当に頑張り屋さんだ、尊敬に値するなどと、自画自賛しながら、表通りに出る路地を徐々に急ぎ足になっていった。

空はどんよりと雲っついていて、星は見えなかった。もっとも、東京のこの銀座で星が見えたことなど数少ない。

雨でも降るのか・・・

雨は好きではないが、これだけ蒸し暑いと、嫌いな雨を期待してしまう自分がいた。

いや、雨が降り出す前にタクシーを拾って、この疲れたからだを、ゆったりとしたソファに沈めたい。

尚子は、薄紫色のブラウスの襟を少し開き、手に持っていた小さなハンカチで首筋を軽く拭いた。

ブラウスも、白のタイトスカートも夏服で、これ以上ない位薄い生地だったが、暑いことにはかわりなかった。

パンテイスティングはさつき脱いできた。それでも暑かった。

尚子は、路地を出る足を速めた。そこを出て早くタクシーを捕まえたかった。早く冷房の中に身を置いて、仕事の疲れとともに家路につきたかった。

ナンバーワンとまではいかないが、常にトップクラスの成績を維持しているホステスである自分は、相当店に貢献している筈だった。帰りの車くらい面倒見てくれてもいいはずだ。尚子はそう思うと、店の待遇の悪さに腹が立った。

店を移ってやろうか・・・

尚子はそう思った。自分くらい店に貢献できるホステスは、きつともつと厚待遇で迎えてくれる店があるに違いない。

尚子が高級クラブのホステスになったのが二年前の二十歳の春。銀座でスカウトされて、今の店に移籍したのが二ヶ月前だった。

今の店での貢献度はまだ明確に数字として出ていないが、前職の成績や、この二ヶ月の尚子の成績を鑑みると、当然のようにトップクラスであることがわかる。

クラブホステスが天職だと、尚子は思っていた。身長百六十二センチ、体重四十八キロ。女の中では大きい方かもしれない。スリーサイズは、上から八十六、五十六、八十五。理想的なプロポーションだと思っている。

言い寄る男は後を立たない。現在恋人と呼べる男はいないが、別段欲しいと思ったことはない。男は利用するもので、愛するものではないと思っていた。

自分に投資する男がいれば、寝ることも厭わない。女の武器を使えるものは全て使う、これが尚子のポリシーだった。

今の店ではナンバーワンではなかったが、常に上位の人気を維持している自分は、真のナンバーワンだと思っている。

今の店は居心地がよかった。特にホステス同士の虐めも自分にはなかったし、客層も悪くなかった。給料は若干安いが、その分同伴やボトルキープで稼いでいたので、常に月額八十万の給料を維持していた。

このご時世で月給八十万は、たとえクラブホステスといえども少なくはない。しかも特定の、つまり肉体関係のある常連客がいるわけでもない。

確かに常連客にするために客と寝たこともある。だが、特定の愛人関係になったことはないし、金でからだを売ったこともない。

ブランドものは好きだが、無駄遣いをしているつもりはなかった。酒もあまり飲まないし、煙草も吸わない。勿論ギャンブルもしないので、一人暮らしとは言え、金は貯まる一方だった。

そんなに金を貯めてどうするのか、と聞かれたことがある。
バカなことを聞くものだ、と嘲笑った。

金はいくらあってもありすぎるといふことはない。稼げるときに稼いでおく、これは鉄則だった。

そして稼げる男からは骨の髄までしゃぶりつくす。尚子のホステス道は徹底していた。

男は愛するものではない。愛させるものなのだ。そして女の肉体は出し惜しみするものではない。使えるときに使えるだけ使うものなのだ。尚子の人生の哲学だった。

こんな考えを持つようになったのはいつのことだろうか。

ふと、目の前に人影を見つけ、ぎくりとした。一瞬、足を止めて、その人影を、目を凝らして見つめた。

この路地で、痴漢にあったとか、変質者に遭遇したという話は聞いたことがなかった。

狭い路地、銀座とは言え、ネオンの華やかな光は届いてこない。

じつと目を凝らすと、ようやく人影の正体が見えてきた。

顔見知りだとわかり、幾分ほつとしながらも、何故ここにいるのか疑問に思った。

この時間に、この場所にいることが極めて不自然な相手だったからだ。

まさか、自分を自宅まで送ってくれようと、ここでじつと待っていたとは考えにくい。

尚子は、面倒臭い表情を見せた。疲れているのに・・・と心の中で呟く。

悪い予感がする。面倒なことになりそうな気がした。

尚子は大きく溜め息をついた。

「随分仕事熱心じゃないか」

暗闇の中で、目の前の人影は、そう呟くように言った。

悪いことは続くものだ・・・

暗闇にしっかりと目が慣れてきて、相手の声を聞くと、尚子の気持ちに多少の余裕が出てきた。

「あ、あなただったの・・・びっくりしたわ」

尚子は軽く微笑んだが、男は鋭い視線で尚子を捕らえていた。

「また新しいカモでも見つけたのか」

低い、陰湿な声だった。

「いったい、どうしたって言うの？ 急にこんなところにいたかと思ったら、訳のわからないことを言い出して」

尚子は、首を傾げて、軽く男に向かって微笑んだが、明らかに迷惑そうな口調だった。

「この前のこと、まだ気にしてるのかしら？」

尚子は、バッグから、ケントのメンソールを取り出した。長引きたくはなかったが、タバコを吸わずにはいらなかった。

普段の尚子はタバコを吸わない。持っているケントのメンソールは、業務用兼非常用である。今がその非常用だった。

大きな、男に聞こえるような溜め息をからだ全体で吐いて、ケントを一本啜えた。

疲れているのに。今日は特に疲れていた。

今日は厄日だ。今日一日でいろんな事があつた。そして最後にこれか・・・

「そうやって男を騙し続ける気か？」

尚子は、この男の相手をするのも億劫なくらい疲れていた。だが、放っておくわけにはいかない。こんな所でわざわざ待ち伏せているのだ。尋常ではない。

「騙し続ける？ 詰まらないこと言わないでほしいわ」

尚子は嘲笑に似た笑い声を出した。その声が、余計男の感情を逆なでたようだ。

男は一步、尚子ににじりよると、

「この前の言葉は本気だったのか？ やっぱり俺をからかってい

たのか？」

「騙すとかからかうとか、何を言っているのかわからないわ？」

尚子には、まだ余裕があった。啞えたタバコに、火を点けると、煙を男に向かって吐いた。

「忘れたのか？」

男は搾り出すように声を吐いた。

尚子と男の距離は約五メートルほどである。かすかな街の光に、なんとか男の表情が見える。

男はかなり険しい表情をしていた。こんな顔は今まで一度も見たことはなかった。

本気で怒っていることは確かだった。そして、この男が怒り心頭に発している理由も、実はわかっていた。

だが、この男の性格はある程度知っている。だいそれたことができるような男ではない。

尚子は、そう高をくくっていた。

「さんざんオレを振り回しやがって」

男は吐き捨てるように言った。

「あなたが勝手にあたしにつきまとったんでしょ？ あたしは知らないわ」

尚子は、相手にせずに帰ろうとしたが、男が道を塞ぐように立っている。帰るには、男を押し退けて通らねばならなかった。

尚子は、大きな溜め息を再び吐いた。

今日は本当についてない・・・

昨夜も帰宅が仕事で遅かったにもかかわらず、今日はお気に入りのグッチが新シリーズのバッグを発売するというので、朝早く起きて銀座のグッチへ急いだ。ところが、オープンの一時間前には既に三十人のグッチファンに並ばれていて、二十個の商品は手に入らなかった。

新商品を自慢できなかった悔しさよりも、睡眠時間を削ったにもかかわらず、それが水の泡になったことへの悔しさがあった。

結局、マンションに戻って寝るのも面倒なので、銀座をぶらつくことにしたのだが、くだらないチンピラ風の男にナンパされ、執拗に追い回された。

やっと振り切ったと思ったら、携帯電話を落としているのに気づいた。あわててドコモショップに行き、電話を停止し、新しい電話機を買う羽目になった。

今日はそれだけでは済まなかった。

同伴はドタキャンされるし、店はバタバタする忙しさだった。挙句の果てには、閉店直前に来た客が、常連をいいことになかなか帰らず、貧乏くじを引いてしまった自分が、こんな時間までつきあうことになった。

その上、アフターに誘われることもなく、食事くらいつきあってタクシー代をせしめようとした目論見も外れてしまった。いつもより二時間も余計に仕事をする羽目になった。

送りには間に合わないし、店の最後の片付けまで手伝われる始末だった。

不機嫌極まりないのだ。

尚子は、肉体的に疲れているだけでなく、気分も滅入っていたのだ。そこへきて、この男の出現・・・運が悪いというより、この仕打ちはなんなの？ と問い質したくなる。

「つまらないことを言っただけで、どいてくだらない？ あなを相手にしているほど、あたしは暇じゃないのよ」

男は歯軋りするように、口元を引き締めた。

尚子の口調が、男の気持ちを余計に逆なでることは十分わかっていた。だが、男は、それ以上のことはできない。きつと、振られた腹いせに、嫌味のひとつでも言いたいだけなのだ、そう尚子は思っていた。

一方、男は、尚子の傲慢な態度に、益々怒りが膨らんでいった。

こんな言い方をするような女じゃなかった。少なくとも、一緒にいるときは、優しく甘えてくる可愛い女だった。だが、それは、演

じているに過ぎなかったのだ。可愛い女を演じて、そして自分が利益を得る。そんな計算高い女だったのだ。

それを見抜けなかった自分も愚かだが、純情な男を弄ぶ、この女の根性が許せない、と男は痛感していた。

「許せない」

男は、また一步尚子に近づいた。

「あんたに許してもらおうとは思わないわよ」

あなたからあんたに格下げになった。

「というより、あたしがあんたに何かしたかしら」

尚子は嘲笑するかのように軽蔑した視線を男に投げかけ、更に挑発するように口を尖らせた。

尚子にはわかっていたのだ。何もしなかったからこの男は怒っているのだ。この男が望むような、この男の求めるものに答えていれば、こんな面倒なことにはならなかったと思う。

ばかばかしい。何故、自分のような女がこんな男の機嫌をとらなければならぬのか。怒りたければ怒っていればいい。

どうせ一瞬のことなのだ。この男の目的はわかっている。

所詮負け犬の遠吠えなのだ。気が済むまで吼えさせておきたいところだったが、そうもいかない。

面倒な男だ・・・尚子は口には出さなかったが、そう囁いた。

粘りそうだ。あまり時間はかけられなかった。

あまりゴネるようなら、不本意だが、ほんの少しだけ、この男の望むことをすればいい・・・

「おまえのような女は俺が制裁を与えてやる」

男が歯軋りするように吐いた。

「どうするつもり？」

尚子は、いつもと違う男の態度によろやく、尋常ではない雰囲気を読み取ると一歩下がった。

銀座の繁華街だが、平日の午前三時となると、人通りも少なくなる。しかも、雑居ビルの通用口から出てきた、路地裏なので、全く

とっていいほど人気はなかった。

助けを呼んだほうがいいか……？

尚子は考えた。だが、この男は、そんな大胆なことができるような男ではない、という甘い考えがあった。

きつと、言うだけ言って、自分は解放される。そう信じていた。

また、そのぐらいしか出来ない小心者なのだ。

だが、いつまでもこの男につき合うわけにはいかない。明日は、いや今日は朝八時には起きて支度をしなければならないのだ。

「どうすればいいのよ」

尚子は、男の目を凝視して尋ねた。弱気になつてはいけない。ここは、相手の要望も訊いてみる必要がある。

とにかく落ち着かせることが肝要だった。

「あなたの望むことをすれば気が済むの？」

この男の望むこと……？ あれだけでは満足しなかったということなのか。

「もう、そんなことはどうでもいい！ ただ、おまえを許せないんだ」

やっぱりこの男は何も出来ない、そう尚子は確信した。つべこべ言ってるだけなのだ。

「近いうちに、また誘おうと思ったのよ。ほんとよ。この前は……この前は少し酔っていたみたいで、変なことを言っちゃったかもしれないけど、でも、本心じゃないんだから」

尚子は甘えるように言って、男の出方を待った。心の中では、言葉とは裏腹に、はらわたが煮えくり返っていた。

「だから、今日は帰して？ お願ひ……また連絡するわ」

尚子は、懇願するように目を細めた。この場を早く離れたかったというより、この男から離れたかった。

「あたし、帰るわね」

尚子が歩き出そうとすると、男が道を塞いで、

「まだ帰すわけにはいかないんだよ」

男は、道を塞ぐように両手を広げて、尚子の通行を拒絶した。

「いったい、どうしろって言うのよ！」

尚子に、多少の苛立ちが出てきた。今日は、非常に忙しい一日だった。からだは疲れ切っていて、早く休めたかった。

「逆ギレか？」

男は嘲笑に似た笑いを見せた。

不気味な笑いだ、尚子は背筋に冷たいものを感じた。

この男は、こんな表情を持った男だったのだろうか・・・

こんなところで、こんなくだらない男の相手をするほど、肉体的にも、精神的にも、余裕はなかったのだ。

まったく、面倒臭い男だ・・・

尚子は、軽く舌打ちをして、吸っていたタバコを足元に捨てた。

男は、無言で尚子を睨み、じりじりと近づいてくる。

ふと、何かが 顔面にぽつりと当たった。

雨だ・・・

尚子は、ちらつと空を見上げた。が、すぐに視線を男に向ける。

雨が降ってきた。面倒がまた増えたのだ。

尚子は小さく舌打ちをした。どこまでもついてない日だった。

こうなると、早くタクシーを拾って、家路につきたかった。その路地さえ出せば、タクシーは蟻の行列のように連なっているのだ。

逃げるか・・・

しかし、背後は袋路だったので行き止まりだ。もう一度店に逃げ込むか？いや、店に入るには、雑居ビルの通用口の鍵を開けなければならぬ。その鍵は、持っていない。

やはり、この男を説得させて、男を通り越して表通りに出る方法しかない。

また、顔に雨が当たった。本格的に降りだしたようだ。

今日初めて着た紫のブラウスが濡れる・・・

尚子は、今日の同伴のために着てきた、紫のブラウスが雨に濡れ

ることを不快に思った。それも、この男の所為だった。

しかも同伴はドタキャンで、折角のブラウスも無駄になった。そして最後は雨に濡れる。

最悪だ。それもこれもすべてこの男の所為だ。

どこまでもムカつかせる男だった。

尚子は二本目のタバコに火をつけた。イライラがタバコへと走らせる。

尚子は、感情的になるところを、じっと抑えて冷静に言葉を選んだ。

「あたしは・・・あたしは、貴方を騙したり、弄んだりした覚えはないわ。でも、貴方が、そう思うんなら、そうじゃないことを、信じて貰うために、あたしは、貴方に何をしたらいいの？」

男が、ゆつくりと、じりじりと、尚子ににじり寄っていった。尚子は、一歩後ずさると、男を凝視した。

この男が何を考えているのかわからない。ただ、いつもの調子ではないことは、わかりかけてきた。

ここは、したでにでて、男の気分を緩和するしかないと感じた。

「今さら、今さらおせえんだよっ！」

男が、怒鳴り声を上げた。初めて、怒鳴ったような気がした。尚子が、びくりと全身を震わせた。

男に、殺意のような、そんな怖さを感じたのだ。

「ま、待つて、あたしが悪かったと思ってるわ。お願い・・・もつと、冷静になつて？」

尚子の声が少し震えていた。初めて男に対して恐怖心を覚えたのだ。尚子が、次の言葉を探しているうちも、男は一步一步、尚子との距離を縮めていった。

尚子の指から短くなったタバコが下にそのまま落ちた。途中からタバコを吸うことすら忘れていたのだ。

雨が、音を立てて降ってきた。頭に、顔に、お気に入りのブラウスに、全身を包むように本格的に降ってきた。

男は、雨のことなど気にしていないようだった。

そういえば、この男と初めて出会ったのも、雨の降る日だった。自分が、この男を利用しようとか、弄ぼうとか、そういう気持ちで近づいたわけではなかった。気付いたら、男が自分に夢中になっていた、というのが正直な感想だった。

だが、そんなことは、今は通用しない。この場をどう逃れるか、だった。

「貴方とつきあうわ。それでいいでしょ？ あたしを貴方の好きなようにしていいわ・・・だから、今日は帰して？ この次には必ず・・・」

尚子の表情が歪んだ。殺意のようなものを感じて後ずさった。

次の瞬間、衝撃を感じて目の前が真っ白に変わった。

尚子は恐怖のあまり全身が総毛立った。

「どうして・・・？」

言い終わるか、終わらないうちに、尚子の腹部に火鉢を当てられたような、熱い衝撃が走った。

尚子が、それを確認する間もなく、足から力が抜けて、その場に崩れるように倒れこんだ。

「あ、あ、あなた、に・・・は・・・」

尚子は、地面の感触と、腹部からじわじわと滲み出る、生暖かい液体を感じながら、霞む意識の中で、男を見上げた。

雨が目に入ってきて、視界が遮られた。

男は、真上から見下ろす形で、自分を見つめていた。その形相からは、以前に何度か目にしたことがある般若を連想させた。

男が、不敵な微笑みを口元に浮かべた。左手には、出刃包丁が握られていて、真っ赤な血がしたたり落ちていた。男の白いシャツには、返り血が飛んでいる。その返り血も、雨で滲んで、薄められていった。

男は、静かに尚子の顔に屈み込むと、

「男を馬鹿にするから、こうなるんだ」と、喉から搾り出すような

声で言った。

「これでおまえはオレ一人のものだ」

男はにやりと笑った。

尚子は、苦痛に顔を歪めて、男に救いを求めるように見上げている。口元に血を滲ませて、何かを訴えるように、唇を震わせている。だが、言葉にはならなかった。

男は立ち上がった。

満足そうに、尚子の顔を凝視していたが、軽く嘲笑に似た笑みを漏らすと、手に持っていた包丁を、尚子の喉下に向けて、一気に振り下ろそうとしていた。

「ま、まって・・・」

尚子は消え入りそうな声で、男の足元を弱々しく掴もうと、手を差し伸べたが、手に力が入らなかった。そのまま意識が薄れていった。

自分は死ぬ・・・

尚子が最後の力を振り絞って、閉じていた瞼を開くと、屈み込んで自分を見ている黒い影が映り、微かに「ふふっ」という嘲笑の声を聞いたとたん、頭を掴まれて、喉元に鋭い衝撃が走った。

【続く】

第2章 発 端

1

予想もしていなかった突然の雨だった。

どんよりとした黒い雲が、急に太陽を遮ったかと思った矢先の、南国のスコールのようなどしゃぶりの雨だった。

遠くで雷の音も聞こえる。

街中が騒然となって、雨を凌ごうとあっちこっちに駆け回る人々でこった返していた。

さっきまでの晴天と、自信に満ちた天気予報を考えると、傘を持つていない人がほとんどなのは無理もなかった。

大きな買い物袋を持った主婦は、慌てふためきながら走り回る少女を尻目に、ゆっくりとした歩調で雨宿り先を探していた。学校帰りの小学生は、キャーキャー騒ぎながら走っていた。軒下で、ハンカチで頭を拭きながら、空を恨めしそうに見上げる頭の薄い老人や、そうかという、身体が濡れるのも気にせず、諦めたように普通の歩調とふて腐れた態度で家路についている男子高校生もいる。

街の中は、一瞬にして別世界のような様相を醸し出した。

日傘を差して悠然と歩く主婦もいる。幸運にも傘を持っていた人もいるし、どこかで購入したのか、雨傘を差す人が、走り回る人を尻目に歩いていた。

大粒の雨が、アスファルトに跳ね返って、傘を差していた人の足元を濡らしていた。

街を包む音と雰囲気が一変した。そして、人々の表情も・・・

七月一日火曜日、午後五時、梅雨明け宣言がなされた翌日のことである。

バケツをひっくり返したような夕立だった。

会社の終業時間までには、まだ一時間ほどあったので、帰宅する会社員の姿はあまりない。それが不幸中の幸いと言えたかもしれない。

退社時間と重なれば、こんな状態では済まなかっただろう。

神崎俊之は幸運にも車の中にいた。仕事で業者との打合せのために、横浜市西区の花咲町あたりを関内に向かって走行していた。

この辺りは、左に東急東横線の高架があり、その先がみなとみらい地区である。日本で最も高層と言われているランドマークタワーが、目の前に悠然と聳え立っているが、その頂上付近は、どんよりした雲に覆われていた。

フロントガラスが割れるのではないかと危惧するような勢いのある雨が、神崎の視界を遮る。ワイパーの速度を一段上げて、遮る視界に何とか対応しながら、BMWの速度を落とした。

二車線道路は、全体的に走る車の速度が落ちたような気がする。神崎は左車線を流れに沿って減速していたが、そこには別の理由もあった。

煙草が切れたのが約三十分前。混み入った街中の走行と、突然の雨でイライラが募り始めた。

もう、精神的にも持ちそうにない・・・

煙草の自動販売機を探していた。

雨の中へ車から出るのは億劫だったが、煙草の吸えないイライラには勝てそうになかった。

ふと、左にタバコ屋を見つけると、躊躇わずに徐々に車を減速させて左に寄った。

二メートル程の歩道の向こうにタバコ屋がある。

神崎は、車内の後部座席へ振り返り、傘が置いてないか探したが、それがないとわかると、軽く舌打ちをして、車の中から窓越しに空を仰いだ。

雨に濡れてまでタバコを買いに行くのは億劫だ。だが、タバコの

切れた時間を過ごすには限界を超えていた。

どうせ夕立だ、止むまで待つか・・・とも考えたが、そう時間に余裕があるわけではなかった。

これから向かうビルにタバコの自販機が設置してあったか思い出してみるが、そうちよくちよく行く場所ではなかったため、そこまでは思い出せない。

なかったら悲惨だ。何時間もの間、打合せの中で禁煙しなければならなかった。

そんなことはできそうにない。

勿論、業者からの貰いタバコなど、彼のプライドが許さなかった。仕方ない・・・

神崎は、後方から車が来ていないのを確認すると、仕方なく車のドアを勢いよく開けて外へ出た。

途端に、大粒の雨が全身に叩きつけた。顔を雨から避けるように、タバコ屋の庇の下に駆け込んだ。

タバコ屋の、宝くじ売り場のような小さな窓の中には、涼しい顔でお茶を飲みながらテレビに夢中の老婆がいた。

神崎には目もくれない。

自販機の中に欲しい銘柄があれば、わざわざ老婆の自分の世界を邪魔して、しわくちなな不機嫌顔を見る必要はない。

白いワイシャツがあつという間にびしょ濡れになった。素肌に張りつくシャツの感触は、何とも気持ちの悪いものだった。

スラックスのポケットから小銭を取り出すと、自販機を眺めて、ケントの一ミリを探した。目指すタバコの位置を確認すると、小銭を入れボタンを押した。

彼は、タバコの纏め買いをしない。せいぜい二個までだ。タバコを持ち過ぎると、吸う量も増える。本数を減らすための小さな抵抗だった。足元で小箱が落ちる音を聞いて、神崎は腰を下ろした。

待てよ、これから打合せだ。一箱くらい簡単に吸ってしまうかもしれない。もう一箱は買っておくか・・・

雨の中を、再び外に出るのも面倒だった。

そう考えて、ポケットの小銭を出そうと、立ち上がりかけた。

そこへ・・・

「ご、ごめんなさい」

神崎のお尻に何かが当たり、背後で詫びる声がした。神崎は首だけ振って見上げた。

そこには、雨にびしょ濡れになった女性、年齢は二十歳前後だろうか、長い髪をびったりと顔に張りつかせて立っていた。

「いえ、大丈夫です」

神崎は、そう言って女に並ぶように立ち上がると、改めて女を見つめた。

タバコ屋の庇の下に入ってホッとしているその女は、身長が百六十センチ弱で、スレンダーな身体つきに、小さなプラダのバッグを肩から提げているOL風の女だった。

突然の雨で、桜木町の駅からここまで走ってきたと見え、かすかに肩で息を弾ませている。

白いブラウスに、膝上くらいの薄いピンク色のタイトスカートを穿いていた。相当濡れたと見え、白いブラウスが肌にびったりと張りついて、下の薄いレモン色のブラジャーがくつきりと見えていた。

神崎は、慌ててそれから目を逸らすと、

「突然の夕立は迷惑ですね」

と、天を仰いで微笑みながら呟くように言った。女は、聞こえなかったのか、それには反応しなかったが、

「でも、雨は嫌いじゃないんです」

そう言って、神崎に微笑みかけた。その笑顔を見た神崎は、背中に電流が走ったような感覚に陥った。小さな丸顔に、目がぱっちりとしていて、笑うと口元に小さく笑窪がくつきりと現れていた。

可愛い・・・

神崎は、身体の中がかつと熱くなるのを感じた。

タバコをもう一箱買うことなどすっかり忘れていた。

「すぐ止むと思って走ってきたのに・・・止みそうもないわ」

駅前のスーパーで傘を買ってこなかったことを悔いている感じだった。

「目的地はまだ遠いんですか？」

トランクの中になら傘があつたかもしれない、と神崎は思い出した。こんな姿で走らせるのは酷だろう、と神崎は考えていた。

「あと半分くらいなんですけど・・・ここからは急な坂を上るので走れないかも・・・」

女は空を見上げて、

「止みそうにないわね」と、呟いた。

空は、灰色一色に染まって、雲の切れ間が見えなかった。雷の音も近づいているように思える。

空がかすかに光った。

「送りましょうか？」

咄嗟に出た言葉だった。傘を貸そうかと言おうと思ったが、いざトランクの中に傘がなかったら、いい恥じ晒しだった。

「えっ？」

「私は車なので、送りますよ」

目の前に止まっている黒のBMWを指して、神崎は言った。女は、指先の車を見ながら、

「そんなこと、申し訳ないわ」

彼女の表情からは、それが遠慮なのか警戒なのか読み取れなかった。ただ、まだ明るさの残る午後五時過ぎに、街中で犯罪行為をするほど愚かな男ではないし、そう見られているとも思えない。どこかへ連れ込むほどの若さも気力もない。

だが、彼女がそこまで察してくれるかは疑問だった。

「このままだと風邪をひきますよ。早く帰って着替えた方がいい」
彼女は、自分のブラウスを見て、一瞬恥ずかしそうに胸元を両腕で隠した。

「あつ、いや、そういう意味では・・・」

神崎は、誤解されたと思い、言葉を濁した。彼女はくすりと笑うと、

「回り道をさせてしまうことになりますから・・・」

神崎はちらつと腕時計に目をやり、

「約束の時間まではまだ余裕がありますから大丈夫ですよ」

それは事実だった。そして、このあと予定があるから、送る以上の事はしないというニュアンスも含んでの台詞だった・・・つもりである。

「でも・・・ご迷惑じゃ・・・」

「迷惑なら声をかけずにさっさと消えますけど」

神崎は軽く微笑んで、そう言った。彼女もつられて微笑むと、

「それじゃあ、お言葉に甘えさせて頂きます」

とはつきり神崎の申し出を承諾した。

神崎は頷くと、先にタバコ屋の庇から出て、車の助手席のドアを開けて、彼女を招いた。

女は、につこりと微笑んで、小走りに車に近づいて、助手席に乗り込んだ。神崎は、ゆっくりとドアを閉めると、運転席に回り込んで、車に乗り込んだ。

さつきより余計雨に晒されて、彼のワイシャツは完全に肌を映し出していた。

神崎は、後部座席を振り返って、タオルがないか探したが、期待は虚しかった。

「道案内をお願いしますね」

「すみません、無理をお願いします」

「とんでもない」

神崎は、後方を気にしながら車を出した。

「真っ直ぐでいいですか？」

ちらつと助手席に目をやる。濡れて、ぴったりと肌にはりついたブラウスに、シートベルトで身体を締めているので、彼女の肌が余計透けて見えている。ピンクのタイトスカートも、足にぴったりと

はりついて、太腿のラインをくつきりと形作っていた。

「はい」

彼女は、ストッキングを気持ち悪そうに摘まんでいた。

男をときどきさせる姿である。

道路を走る車は相変わらず徐行している。これだけ激しい雨が、フロントガラスを叩きつければ、誰だって運転に慎重になる。

神崎は、前方に目を凝らし、バックミラーとサイドミラーを何度も見ながら、慎重に運転をしていた。

車内のエアコンをドライにして、少しでも濡れた衣服が乾くように気遣う。道案内を誤らないように、スピードは抑えつつ走行を続けた。

「その先の信号を右にお願いします」

神崎は、慎重に前方の対向車を気にしながら右折した。桜木町駅前から日の出町方面に走る。

「次の信号も右なんです」

野毛方面か・・・

彼女が道案内をする以外に、ふたりに会話はなかった。

黙っていると気まずいかな、と思わないではなかったが、運転に気を遣っていたので、話す機会を逸していたのである。

初対面の女に話しかけるのは苦ではないし、どちらかと言えばコミュニケーションを取るのは得意な方だったが、何故か今回は緊張していた。

濡れた彼女の衣服の所為で、彼女の方を見られないというのも原因のひとつだ。

神崎は、今年四十二歳になった、フリーのプランナーの仕事をしている。若い頃は、バーやスナックで、女性に声を掛けることなど何の抵抗もなかったが、最近はそんな機会も減って、こうして偶然とはいえ、見知らぬ女性に声を掛けると緊張してしまう。

オレも歳をとったかな・・・

神崎は、心のうちで苦笑した。

「お仕事は何をなさっているのですか？ 普通のサラリーマンではないように見えますけど」

神崎が黙っていると彼女から話しかけてきた。沈黙が不安を誘うのは、女性も同じらしい。

「どんなふうに見えます？」

神崎は正面を向いたまま、悪戯っぽく訊いた。

彼女は嬉しそうに神崎を見つめて、

「そうですね」

少し考える表情を作った。

「遠慮しないで、見たとおり言っただけ構わないですよ。ついでに年齢も当ててみてください」

なんだか、飲み屋でホステスと話しているみたいだ、と神崎は内心微笑んだ。

「クリエイティブなお仕事をされているように見えますけど違うかしら？ 乗っている車は、黒い五シリーズのBMWだし、車内は質素で綺麗にいらっしやるので、独身に見えますけど・・・それはないかな。雰囲気は会社員っぽくないですね。だからと言って、学者って感じじゃないので、やっぱり会社員だとすれば、広告関係か、メディア関係か、報道関係か。サラリーマンではないとすれば・・・洒落たワインバーのオーナーとか、フリーのファッションデザイナーとか。そんな風に見えますけど。違いますか？」

女は、また少し考える表情をしてから、
「年は、まったくわからないけど、見た目は、三十五、六くらい。若く見られているとしたら、三十八とか三十九とか、そのくらいですか？ 実年齢より上を言ったら、ごめんなさいね」

鋭いカンをしている。

神崎の今日のスタイルは、白のワイシャツにノーネクタイ、ダークブラウンのスラックスに、グレーのジャケットを後部座席に置いてある。どこをどう見たら、そう思えるのかわからないが、確かに鋭い。

神崎は、彼女の男を見る眼に面食らいながらも、改めて彼女を見つめた。

ここまで細かく男を観察できる目・・・普通のOLではなさそうだ。「自己紹介をした方がいいですか？」

「催促しちゃったかしら？」

にこつと笑った顔がとてもキュートだと神崎は思った。

「その前に、貴女のお名前だけでも先に教えて欲しいな」

「あつ、ごめんなさい。送って頂いて名乗らないなんて失礼ですよ。わたしは、吉崎藍っていいいます。アイは藍色の藍なんですけど。今年二十歳になりました。職業は内緒ですけど、平日の夕方にこんなところにいるんだから、普通のOLではないことは確かですよ。現在は独身で、彼氏はいません。こんな感じでいいかしら？」

独身で、彼氏はいません・・・がどんな意味を持つのか、神崎はわからないが、それが真実とは限らないと思った。

ただ、嘘をつく理由もないことは確かだ。

職業を隠したことがちよつと気になったが、言いたくない職業がもしれないし、無職かもしれない。

「今度は私の番ですね」

「ごめんなさい、その前に、その先の路地を右に入ってください。すぐ左にあるマンションが自宅なんです」

神崎は、ゆっくりと車を右折させて路地にはいった。高台にある閑静な住宅街だった。藍が言うように、すぐ左に低層の洒落たマンションが建っていた。

「ここ？」

車をエントランスの前に横付けした。運転席からフロントガラスを通じてマンションを望む。

三階建ての低層マンションで、壁の色は上品なライトブラウン。どう見ても賃貸マンションには見えないが、まさか分譲マンションを購入したわけではないだろう。

両親と同居・・・？それなら頷ける。いや、それ以外考えられな

い。

みなとみらいに向かつて建っているの、ベランダから見る夜景はさぞ綺麗だろうと、神崎は思った。

「到着しましたね」

神崎の言葉にちょっとした落胆があったかもしれない。話が弾みだすと、皮肉にもこういう結果を生むのである。

「貴方の自己紹介を聞いてないわ」

藍はシートベルトを外して、運転席の神崎の方へ姿勢を向けた。目の前に、レモン色が飛び込んできて、神崎は少し顔を赤らめながら視線を外した。

「そうですね。自己紹介をする前に着いてしまいました。でも、私の自己紹介よりも、貴女が着替える方が先です。このままじゃ風邪を引いてしまう」

藍は、自分の洋服をもう一度見回してから、神崎の洋服を見た。

「貴方もびしょ濡れだわ。そのままじゃ風邪をひいてしまうわよ。うちで乾かしていったら？」

「えっ？・・・」

意外な申し出に、神崎は驚きを隠せなかった。彼が過去に女に誘われたことは何度もある。出会ったその日に、意気投合してそのままホテルに行ったことは一度や二度ではない。だから、女に、自分の部屋に誘われることでいちいち驚かないが、会ったその日に、しかも大して会話をしていない相手から、部屋に誘われたのは、記憶にない。

アルコールも入っていないければ、コミュニケーションを十分に取っていたとも言いがたい。

「あら、大丈夫よ。さっき彼氏はいないって言ったでしょ」

そういう問題ではないような・・・

「ご両親は・・・？」

「わたし、一人暮らしですけど」

一瞬耳を疑った。一人暮らしの自分の部屋に誘っている・・・？

彼女は善意で言っているのかもしれないが、さつき知り合った男を、一人暮らしの部屋に招き入れようとしているのだ。

危険だと思わないのだろうか？

それとも、誘っている・・・？

もし誘われているのなら、こんな美味しい話はない。二十歳の女の子に誘われるなんて、ここ二、三年なかったことだ。

自然と期待に胸が高鳴っていく。

勿論神崎は既婚者で、二人の子供がいる。だからと言って、浮気や不倫を否定するつもりはない。お互いがよければ、それは自由恋愛だと思っているし、もし、妻にその気があるのなら、彼は容認するつもりでいる。

実際、妻が浮気をしているのか、過去に不倫の経験があるのか、彼は知る由もないし、知りたいとも思わない。

神崎は、過去に浮気の経験も不倫の味わいもある。

「シャワーでも浴びているうちに、シャツを乾かしましょうよ。自己紹介はそのときに伺います」

屈託のない口調と、純粹な眼差しを見てみると、神崎が期待しているような誘惑があるとは思えなくなってくる。しかし、彼女だつて、二十歳とはいえ、男性経験が全くないわけではないだろう。

男を部屋に入れて、シャワーなんか浴びさせたら、男がどんな心境になるかくらい予想できるはずだった。

その気があると思えない。

まして、彼女だつてびしょ濡れで、ブラウスが透けている。こんな魅力的な女性がシャワーを浴びて出てきたら、変な気持ちになつて当然だろう。もし、それを抑制できる男がいるとしたら、それは三親等内の親族か、同性愛者しかない。

神崎は迷った。こんなチャンスは滅多にないはずだ。いや、二度とないかもしれない。

まして、彼女が本気で自分を誘っているとしたら、据え膳食わぬは・・・という言い伝えもある。

これから行つ打合せまで、あと三十分ちよつと。ここから関内までは十分間に合うが、ここで部屋に入っている時間は、当然ない。打合せの相手は業者だったから、電話をして時間をずらすことは可能だった。後日に延ばしてもいいかもしれない。

応じない手はない・・・

神崎の下半身は、久々の獲物に首をもたげて反応し始めた。藍は、華奢なからだつきだが、胸の膨らみは結構ありそうだった。つんととがった二つの胸を見ていたら、打合せなどどうでもよくなってくる。

神崎の全身の血液が、たぎるように激しく流れ出した。

神崎は、胸の高鳴りを抑えつつ、

「ありがとう。でも、時間がないんだ。このあと大事な仕事の打ち合わせがあるんです」

惜しい、と思う。だが、話しが上手すぎて少し恐いような気もした。

それに、神崎は業者だからといって、蔑ろにできない性格だった。クライアントだからといって、身勝手に何でもしていいというわけではない。ビジネスの約束は、きちつと守らねばならないのだ。

「そうなんですか・・・」

彼女がうつむいた。彼女の表情から、それが落胆か、安堵か、神崎には判断できなかった。

「貴女の気持ちだけ、ありがたく頂いておきます」

「でも、その恰好じゃ風邪をひくわ」

「大丈夫。車のヒーターを一杯にして乾かしますから」

「こんな暑いのに？」

「汗を掻きながら乾かしますよ」

神崎は笑っていった。藍もつられて笑うと、

「それじゃあ乾かないわ」

「そうかもしれない」

「残念ですけど、お忙しそうだし、諦めるわ」

藍は車を降り掛けて、

「じゃあ、せめてお名前だけでも聞かせてください」

と、思い出したようにドアを開けながら神崎を見た。

「神崎俊之といいます。フリーのプランナーをしてるんです。貴方の読みが当たりました」

そう言つと、腕時計をちらつと見て、「じゃあ」と言い、藍を促した。藍は、それ以上誘うこともなく、車のドアを閉めると、深く頭を下げて、マンションのエントランスに入つていった。

後悔するかもしれない・・・

神崎は、車をゆつくりとバックさせながら、脳裡に浮かぶ藍の薄いレモン色のブラジャーを浮かべて、これからある打合せを恨めしく感じていた。

神崎の決断を褒めるかのように、空が小さく光った。

2

よく降る雨だ・・・

神崎俊之は、大きな目の傘を差して、横浜市中区の繁華街の歩道を、水溜りに足を取られないように慎重に歩いていた。

また降りやがった・・・

だが、今朝の天気予報士は信用できそうだった。所によっては、夕方雷雨に見舞われる地域があるとはつきり言っていた。

もっとも、梅雨明けしてから、こう毎日夕立があれば、天気予報でも一言付け加えることくらいするかもしれない。

神崎は、その忠告どおり傘を車に積んで家を出て、午後の打合せは傘を持って車を離れた。

三日前に、突然の夕立にあつて、びしょ濡れになつた経験から得た教訓である。

七月四日金曜日。今日は、午前中から新商品のイベント開催の長い最終打合せがあり、やっと終了したのが午後四時過ぎである。少々疲れていた。

この疲れの原因は、神崎が、長年の経験と消費者の動向から弾き出したマーケティング戦略の提案を、持論を曲げずに意地を張る主催者のオーナーを説き伏せた疲労感ばかりではなく、夕方になると、決まって突然降ってくる雨の鬱陶しさもあった。

あのオーナーの頑固さには、スタッフ全員が参っていた。会社が、創業者が一代で築き上げたオーナー会社なので、それも仕方がなかったが、時代錯誤のあの理論には毎回閉口させられる。彼を説得出来たこと自体奇跡に近い。それだけでも、かなりの評価に値する。その上、今回のイベントが成功すれば、今後の大口取引は間違いなかった。

神崎は、疲れとは裏腹に、充実感に浸っていた。

しかし、この雨にはどうしても不快指数が上がってしまう。

最近は、タ立が多いためか、外を歩くときは傘を持つ習慣を身につけた人々が多く、いきなりの雷雨にも対応できているようで、傘を差している人も少なくはなかった。

遠くで雷が鳴った。

打合せも上手くいった。この後は特に予定は入っていない。こんな日は、ガールフレンドでも誘って、好きなワインで乾杯したい心境だった。

電話してみるか・・・

誰が時間的に誘えそうか、神崎の頭のコンピューターは目まぐるしく廻っていた。

彼のコンピューターは、こういうときは特に高性能ぶりを発揮する。瞬く間に、三、四人の女性の名前を弾き出した。

そういえば、吉崎藍はどうしているだろうか？

コンピューターの最も新しい情報を、彼は取り出していた。あれから三日が過ぎていた。

雨の日の出会い。だが、何の進展もなく、期待された申し出も自分から潰してしまった、つかの間の出会いだった。

もう一度会いたい、と思ったことはこの三日間で何度もある。だが、名前は聞いたが連絡先は知らない。自宅は知っているが、まさかストーカーのように待ち伏せるわけにはいかない。

せめて、電話番号くらい訊いておくべきだった・・・

自宅に誘うくらいだから連絡先くらい教えるだろうし、連絡できれば、あつて貰うことだって可能だったかもしれない。

惜しいことをしたかな・・・

神崎の脳裡に、また薄いレモン色のブラジャーがちらついて、軽く頭を振った。

それはそうと、誰に電話するかな・・・

神崎の車を置いている駐車場は、この角を曲がったパーキングだ。そう思うと、自然と足取りが速くなった。

角を曲がると、不意に人が神崎の胸に体当たりしてきた。

「おっと・・・」

「ご、ごめんなさい」

体当たりをしてきたのは女だった。ぶつかった反動で、女は神崎の前でしりもちをついた。

「大丈夫ですか？」

神崎は、目の前で座り込んだ女の腕を掴んで立ち上がらせた。

「すいません・・・」

そう言つて神崎を見上げた女の顔を見た神崎は、驚愕で声を失った。

女も、神崎の顔を見て、一瞬眼を疑うように凝視したあと、ほっとしたような安堵の表情を見せた。

「藍さん・・・？」

「神崎さん！」

「ど、どうしてここに・・・？」

藍の声はかすれていた。

「また会いましたね」

藍の言葉と神崎の台詞が同時に口をついた。藍は、また傘を差し
ていなかった。彼女は傘を差すのが嫌いなのかもしれない。そうい
えば、雨は嫌いじゃないって言っていたことを思い出した。

「貴女は、よく私にぶつかってくる」

前日も、神崎がタバコを買っているときに、彼女が神崎にぶつか
ってきたのを思い出して笑った。

吉崎藍は、ブルーのブラウスに、花柄のフレアースカートを穿い
ていた。足先までは見えなかったが、ストッキングは穿いていない
ようだった。白いサンダルを履いている。この前と同じ、プラダの
バッグを肩から提げている。

ブルーのブラウスが、雨でびつたりと肌にくっついていて、下の
ブルーのブラジャーの肩紐が透けている。ライトブラウンの髪が、
顔にぴつたりとはりついていた。

「怪我はないですか？」

神崎は、握っていた藍の手を離しながら訊いた。

「た、助けてください」

藍は、離そうとしている手を力強く握りなおして、すぐるような
神崎を見上げた。

「はっ？ ど、どういうことですか？」

藍は小さく震えている。両腕を神崎の背中に廻し、顔を神崎の胸
に埋めてぴたりとくっついてきた。

「何が・・・？」

神崎が藍を覗き込もうとしたとき、背後から声がした。

「おっさん、その女を渡せよ」

おっさん・・・？

声の方を見上げると、二メートルほど先に、茶髪のだらしない恰
好をした、年の頃なら十八、九くらいのガキ・・・少年が立ってい
た。藍が今走ってきた方向だ。彼も傘を持たずに、着ている青のア
ロハシャツがべつたりと肌に張りついていていた。アロハシャツを第二

ボタンまで外し、そこからシルバーのネックレスが見えている。だぶだぶのジーパンはだらしく腰で穿いていて、膝のあたりが破けている。履いているシューズは泥だらけで真っ黒だった。

神崎は、男と藍を見比べながら、ふたりの関係考えた。

こんな男とつきあっているのか？

「お願い・・・た、助けて」

藍がもう一度呟いた。

「おっさん、聞こえてんのかよお」

「本人は嫌がつてる」

「ああっ？ てめえ、何モンだ？ いいから、その女をこっちに渡せばいいんだよ」

男がにじり寄ってきた。藍が、神崎の胸元で嫌々をしている。

「彼女は、そっちへ行きたくないらしい」

神崎は、熱くなっている男を尻目に冷静に喋っている。それが、余計男を苛立たせるらしい。

「そんなこと、てめえには関係ねえ。痛い目に合いたくなかったら、素直にこっちに渡せばいいんだよ」

痛い目ねえ・・・

確かに痛い目には合いたくない・・・

「この人をどうしようっていうのかな？」

神崎は、男を真っ直ぐに見据えて訊いた。

「どうしようと俺の勝手だろう。てめえには関係ねえ」

男は凄んでいる。その態度が、いかにも弱い犬が強がつて吼えているようで、ますます神崎に余裕と冷静さを与えていった。

「関係ないこともないんだが・・・」

「ごちゃごちゃ言ってるねえで、さっさとこっちへ渡せよ」

男がイライラしながら一歩踏み込んだ。男と神崎の距離は約二メートル弱。

男の身長は百七十くらいだろうか、茶髪が、本来ならムースか何かで固めてあるのだろうが、今は雨に当たって、だらしく萎れて

いる。細身でなよつとしているので、腕力はたいしたことはなさそうだ。

神崎は、そう判断した。

だが、こういう男に限って刃物は持っているかもしれない。

「嫌だと言ったら？」

神崎は、冷静に相手を見定めた。四十二歳とはいえ、昔は暴走族に所属していた時期もあり、腕には自信があつた。華奢な、チンピラ風情に負けるような神崎ではない。

だが、雨の中で、しかも繁華街の中で、こんなガキ相手の乱闘は、みつともないだけでなく、大人気ない気もしていた。

「その女はオレが目をつけたんだ。いいから渡せ」

精一杯凄んでいるが、神崎には少しも効いていない。

目をつけた・・・？なるほど。

「知り合い？」

神崎は、藍に耳元で囁くように訊いた。藍は、嫌々をするように首を振った。

「じゃあ、こいつがどうなってもいいね」

そう藍に囁いて、

「彼女はあんたの所へ行きたくないって言ってる。オレは、彼女の知り合いなんだが、実は、彼女と待ち合わせていて、あんまり遅いから迎えにきてみたんだ。あんたが、この子のどういう知り合いかわらないが、オレの彼女に手を出さないで貰いたい」

はったりである。

「あんたの女あ？」

語尾が上がる。男も意外な返答に驚いたようだ。そして、藍も驚いたようにちらつと神崎を見上げた。

「ふざけるな。てめえみたいな中年クソオヤジの女のわけねえだろっ」

中年クソオヤジ・・・この一言で神崎は切れた。

人が冷静に話し合いで解決しようと思ってるのに・・・

人通りが少ないとはいえ、この雨の中でチンピラ相手に格闘する気は全くなかった。それに、喧嘩になれば、この男に勝ち目はない。こんなヤサ男を叩きのめすことは造作ないことだった。しかも、街中で乱闘騒ぎを起こして、警察沙汰になりたくなかったし、折角仕事が上手くいったいい気分を、こんな男の為に壊されなくなかった。できれば穏便に終わらせたかった。なのに、中年クソオヤジ・・・

「私の後ろに隠れなさい」

神崎は、藍に囁いて、藍を神崎の背中に回らせた。そして、さしていた傘をたたむと、きちんとホックを留めて一本のステッキ状態にした。

神崎は、三步ほど男の方へ足を踏み込むと、ステッキ状になった傘をビシッと男の方へ突きつけて、

「そっちこそ怪我をしないうちに消えた方がいい。あまり喧嘩は好きじゃないんだが、それでも、昔は無茶やってたこともあるんだ」

神崎の鋭い視線が獲物を捕らえた。突き刺すような目と、傘の先が男を狙う。

神崎は、なおも一步踏み出した。

男が怯んで、一步後ずさった。男が、ジーパンのポケットに手を入れた。

刃物か・・・？

だが、神崎は怯まずに、また一步前に踏み出して、男を睨みつけた。

「隠している刃物を出せ！ そのかわり、オレはおまえをぶつ殺す！」

思ってもいない行動と、神崎の刺すような視線に、男は恐怖感を抱いたのだろう。

「くそっ、今度会ったら、ただじゃ済まねえからな」

男は、怯んで捨て台詞を吐くと、踵を返して元来た道を逃げるように去って行った。

神崎は、暫くの間、男の後姿を見ていた。振り返ってくる可能性

はないようだ。

「もう、大丈夫ですよ」

神崎は、振り返って藍に向かって微笑んだ。傘をもう一度開いて、藍の上に差した。藍は、「恐かった」と言って、神崎にしがみついていた。まだ、身体が少し震えているのは、雨に当たって寒い所為ではないだろう。

「もういないよ」

神崎がそう言っているのに、藍は神崎から離れようとしなかった。

「また助けていただいたわ」

「縁があるみたいですね、オレたち」

藍は黙って頷いた。

「オレの彼女・・・？」

藍が小さく訊いた。

「えっ？ あっ・・・いや、あの場面ではそう言った方がいいかなって・・・迷惑だったかな？」

藍が小さく笑って首を振った。神崎は、カッと身体が熱くなるのを誤魔化すように、

「何があっただんですか？」

と、肩を軽く抱いて尋ねた。藍の柔らかい胸の温かみが、神崎の薄いシャツを通して伝わってきて、神崎は心臓が高鳴った。

傘をたたんだ所為で、濡れていなかった神崎のシャツがびしょ濡れになった。その上に、藍のブラウスがくっついたので素肌同士が密着しているような感触が伝わってきた。だが、不思議と気持ち悪さを感じなかった。

「雨宿りをしていたら、声を掛けられたの」

オレと一緒に・・・神崎は複雑な感情を抱いた。

「でも、神崎さんの時とは全然違ってた。濡れた洋服を乾かそうって・・・雨が止むまで、近くのラブホテルで時間を潰そうって、私の胸を・・・」

「えっ？ 胸を触られたのかい？」

藍は小さく頷いた。

何てことだ。一発くらい殴っておくべきだったかな。

「腕を掴まれて、離さないから・・・噛みついたの。腕を放した隙に逃げてきたの。あの男、しつこく追いかけてきて、恐かった。誰も・・・誰も助けてくれないから。わたし、走るの、段々疲れてくるし、どうしようって思っていたところへ、貴方にこんな所で会うなんて・・・」

「ほんとに偶然ですね」

神崎は藍が走ってきた道を見回した。繁華街の夕方とはいえ、この路地は人通りが少ないし、車の量も少なかった。歩いている人といえば、買い物帰りの主婦か、高校生や小学生、杖をついた老人くらいなもので、若い女性をチンピラから助けられるような男の姿はなかった。

物騒なところなんだな・・・

「昔、暴れてた時期があるんですか？」

恐怖におののいていたわりには、神崎の台詞をよく憶えている。

「まあね」

「神崎さんて不思議。喧嘩なんて絶対しないように見えるし、ほとんどの男はチンピラに絡まれたら逃げ出すわ」

最近の若い男はだらしがなさ過ぎるのだ。一緒にされても困る。

「女の子が危険な目に合っているのに、放っておけないでしょ？」

「正義感が強いんですね」

「そうでもないけど。本物のヤクザだったら、一緒に逃げてたかも」

藍はくすつと笑った。ようやく恐怖感から緊張が取れてきたのかもしれない。

「それにしても偶然だ」

「でも、あれからずっと会いたいつて思ってた・・・」

藍が、神崎から視線を外さずに言った。

「ほんとですか？」

神崎は、茶化すようにおどけたが、藍の視線をまともに返せずに、

顔を背けた。

「今日は、この前みたいに逃がさないから・・・」
藍が甘えるように囁いた。

【続く】

第3章 甘 美

1

吉崎藍の唇が妖しく濡れていた。

バスローヴを身に纏い、ベッドに仰向けに横たわって、目を閉じてじっとしていた。その姿は、新婚初夜の新妻か、バージンを失おうとしている少女のようで、健気でいとおしく見えた。

一瞬、神崎俊之は、この状況が現実のものとは思えないような錯覚を覚えた。

清楚で大人しい雰囲気を持っている藍は、決して男遊びをしているようには見えず、出会って短時間でセックスをするような女には思えなかった。

だが、自分の信念を貫く強い意志のようなものを持った女だとすれば、失敗を恐れずに、神崎の胸に飛び込んでくる行動は頷けた。それに、神崎に気持ちが悪いたとすれば、彼女の男を見る眼は、そう間違っではないといえるかもしれない。

珍しく、神崎の鼓動が激しく高鳴っていた。

こうなる前に、少し会話を楽しむ時間が必要だったかもしれない、とは思う。決して神崎が、ベッドで寝ているように指示したわけではなかったし、いずれこうなるとしても、唐突に行動にでるとは、神崎とて予想していなかった。

勿論、雨に濡れた衣類を着替える必要があったし、冷えたからだを温めることを考えると、部屋に入ってすぐにバスルームを使うのは当然だった。

神崎が望んでいることが、ごく自然に、そしてスムーズに運んでいることに、神崎自身驚きと、躊躇いがあった。

ここは、みなとみらい地区にある、ヨコハマインターコンチネン

タルホテルのシーサイドツインルームである。

神崎は、横浜市中区福富町で、チンピラに追われている藍に、偶然再会してチンピラから藍を救った。

「自宅まで送ろう」

雨に濡れた藍を見て、神崎は、そう言っただけで自慢のBMWに乗せた。車をスタートさせると、途端に藍がとんでもないことを言い出した。「今日は逃がさないから・・・」の言葉どおり、素直に送られようとしなかったのである。

「あなたもわたしの所為でびしょ濡れだわ。今日こそはわたしの家に寄ってくださいね？」

「そういうわけにはいかないよ」

神崎は、あくまでも紳士的に、高鳴る気持ちを抑えた。

「どうして？ また、打合せって逃げるの？」

「逃げる・・・この前は、本当に打合せだったんだ」

藍は、可笑しそうに笑って、

「今日は打合せはなさそうね」

「あつ・・・」

簡単な誘導尋問に引っかけた自分が、可笑しかった。

「年頃の女の子の子の部屋に入るわけにはいかない」

「紳士的なんですね」

藍の口調は、少々皮肉に聞こえた。

確かに、ふたりの衣服は、雨でびしょ濡れだった。しかも、神崎がびしょ濡れになったのは、はからずも藍を助けたからである。藍が責任を感じるのも無理はない。

藍は、善意で神崎の衣服の心配をしているのかもしれない。

神崎が、いくら若い頃モテたとしても、それほど自惚れ屋ではないし、プレイボーイでもない。

勿論、神崎とて藍が気にならないわけではなかったし、藍の甘えるような誘いの言葉を振り払うほど野暮ではない。

だからといって、藍の誘いに簡単に乗るわけにはいかなかった。

しかも、神崎はまだ藍のことをほとんど知らない。出会って、まだ二回目で、時間に換算すると一時間も経っていない。その程度の関係で、相手の部屋に押し入るほど非常識ではなかった。

彼女が、何故そこまで自分の部屋に神崎を迎え入れたいのかわからないが、それに甘えるわけにはいかなかった。

せっかくの再会だったので、このまま別れるのは惜しい気もした。しかも、この後の予定は全くなく、誰かを誘って食事でもしようと思っていたところだった。渡りに船といったら彼女に失礼だが、神崎も藍に会いたいと思っていたことは確かだ。だが、濡れた洋服のまま食事に誘うわけにもいかない。

雨に濡れていることを恨めしく思いながらも、ここは送ることが最善だと判断した。

だが、神崎がどんなに説得しても、彼女は頑なに帰ろうとしなかった。

拳句の果てには、「わたしが好きですか？」と、淋しそうな視線を神崎に向ける始末である。

神崎は、帰すことを諦めて、別の方法で対処することを考えた。

結局、シティホテルに部屋を取って、とりあえず濡れた洋服と冷えたからだを温めることにしたのだ。

彼女の部屋と、シティホテル。どこに違いがあるのかはわからないが、神崎としてはいくらか気が楽だったことは確かだ。

このあと予定がなかったのは大変ラッキーだった、と彼はその幸運に喜んだ。

部屋に入り、とりあえず藍にシャワーを勧めた。

藍は、最初神崎がシティホテルに部屋を取ると言い出したとき、お金がかかるから申し訳ないと恐縮していたが、彼女の部屋に入るわけにはいかないと神崎が言い張ると、恐縮しながらも承諾したの

だ。

自分がシャワーを使い、その後ワインでも嗜みながらゆつくりと話し合ってから、意気投合したら、もしかしたら・・・と考えていた。

ところが・・・

藍の後に神崎がバスルームから出てくると、藍は目を閉じてベッドに横たわっていた。そんな藍を見て、会話の時間を作るほど、神崎も野暮ではなかった。

いや、最初は眠ってしまったのかと思ったのだ。チンピラから逃れた安心感と、シャワーを使ってからだを温めた爽快感、そして紳士的な神崎と共にするという安堵感から、藍を深い眠りへと誘ったのかもしれない。だが、違っていた。

もたもたしている神崎に、藍は拗ねたような声で、「早く傍にきて・・・」と誘ったのだ。

「ああ」と、神崎は曖昧に返答して、ベッド脇に腰を下ろした。

いくら神崎を気に入ったからといって、そんなに簡単にからだを許すものなのか？ という疑問が沸かなくもない。

そこに何らかの陰謀があるのか、それとも、最近の若い子は、勢いやその場の雰囲気、簡単にセックスを楽しんでしまうのか、神崎の心は複雑だった。

どっちにしても、この状況で何もしないほど、神崎も無神経ではない。

ゆつくりと藍の横にからだを滑り込ませて、藍の顔を見つめた。

髪がまだ少し濡れているようだった。シャンプーの匂いが、神崎の鼻を掠めて、神崎の脳が疼いた。

藍の胸が、バスローヴの下で大きく波打っている。

彼女も緊張しているのだろう・・・

この姿を見て神崎は、藍が何らかの意図があって神崎に抱かれようとしているのではないことや、藍が遊びなれていないことがわか

ったような気がした。

彼女も、最大限の勇気を奮っての行動なのだ。

彼女の健気な姿に、神崎は邪推を振り払うことができた。

ふたりとも口を開こうとしなかった。いや、何か喋って、折角のこの雰囲気壊したくなかった。

神崎は、右手で藍の左肩を軽く掴んで、藍の唇に近づいた。

午後七時を回っていた。普段はまだ明るいはずの外が、雨雲が張り出している所為で、どんより薄暗くなっていた。大きな窓から見える、ヨコハマベイブリッジの灯りは、どんより曇った空にぼやけて霞んでいた。

部屋の薄明かりの中、藍の唇は濡れてきらきら輝いていた。

藍は、目を閉じたまま、かすかに神崎の方へ顔を向けて、ほんの少し口を開いた。

白い歯が唇の間からちらつと見える。

神崎は、藍の小さな唇に自分の唇を触れさせた。軟らかい、しつとりとした唇だった。

藍の心臓の鼓動が神崎に伝わってくる。

神崎は、唇を離して一度藍の顔を見つめた。藍も、そつと瞳を開けると、神崎を見つめて頷いた。

神崎が何か言おうと口を開いた時、藍は目を細めて首を振りながら、神崎の口に人差し指を縦に当てた。

ふたりの間に言葉はいらない、と言いたかったのだろう。

神崎は、もう一度藍に顔を近づけると、再び目を閉じた藍の唇に自分のそれを押し当てた。

今度は、藍の舌が神崎の口の中にゆっくりと入ってきた。

神崎の舌がそれに優しく答える。神崎は、舌を絡ませながら藍の舌を押し戻して、藍の口の中へ入っていった。

しつとりとした舌が絡み合う。まるでふたつの舌がひとつに溶け込んでいくかのように、ふたつは一体化していった。

神崎は唇を離さずに、藍のバスローヴの紐を解いていった。ゆっ

くりとバスローヴを捲り、肩口からゆっくりと丁寧に脱がしていった。

藍が、左肩を浮かせてそれに答える。

一度、神崎は唇を離して、藍の瞳を見つめながら、からだを浮かせた藍からバスローヴを滑るように抜き取った。

下着はつけていなかった。

白い艶やかな肌が視界に飛び込んできた。ふたつの乳房が釣鐘のように隆起している。その真ん中に、薄いピンク色の乳首が、つんと上を向いて尖っていた。左の乳房が大きく波打っている。

華奢なからだつきにしては、ふくよかな乳房をしていると、神崎は思った。そして、弾力のある乳房から、きゅっと引き締まった腰まで、なだらかな曲線を描いている。小さな縦に伸びている臍、そして腰からすらっと伸びているふたつの脚。細すぎず、柔らかそうな太腿から、小さく膨らんだふくらはぎまで、若さを象徴するかわような白い肌が、足先まで続いていた。

「綺麗だ・・・」

神崎が思わず呟くと、藍は神崎の胸の中に隠れるように顔を埋めて、

「あんまり見ないで、恥ずかしいわ」と、囁いた。

「もつとよく見せて」

「ダメ・・・恥ずかしくて、神崎さんの顔をまともに見れないわ」可愛い・・・この子は性格まで可愛い、そう感じた。

「あなたも、あなたも脱いでください」

藍はそう言って、神崎のバスローヴの紐に手をかけた。

神崎は、藍に向かって微笑みながら頷くと、自分でバスローヴの紐を解いて、素早く脱いだ。

藍は、神崎のからだを眩しそうに見つめると、「素敵・・・」と一言呟いた。

神崎は、身長百七十六センチ、体重六十二キロの細身のからだだ。

それも、三十五、六歳までは、体重五十七、八キロの、どちらかといえは痩せ型だった。四十歳になって、急に腹が出てきたような気がしていた。ただ、若い頃からある程度鍛えてあるので、引き締まっただけで筋肉質だった。

最近では、少年サッカーチームのコーチをしていて、毎週土曜日には、早朝から少年たちとグラウンドを走り回っているの、ぶよぶよの中年太りはなんとか避けられている。

人に自慢するほどの肉体ではないが、年齢を考えると、十分魅力的なからだだと思っている。

「初めて会った時から、ずっと、ずっとこうなることを望んでいたような気がする」

藍が、うつとりとした目で、神崎の胸板を指先でなぞりながら、見つめていた。

「いいの？」

「まだそんなこと言ってる・・・」

藍が、また目を閉じた。

こういう状況で、相手に確認するほどの臆病者ではなかったはずだが、何故か神崎は、藍のような子が自分に身を任せるのが信じられなかった。

タバコ屋の軒下で出会ってから、たいした会話もしていないのに、一体この子はオレのどこが気に入ったというのか・・・

確かに、さっきのチンピラとの立ち回りは恰好よかったと思う。

そうか！

最初は「憧れ」だった。さっきの出来事で、「好き」に変わった可能性はある。

神崎は、余計なことを考えずに、今の状況を素直に受け入れることにした。あとは、どうにでもなれ、だ。

神崎は、軽く藍の唇に自分のそれを触れさせてから、藍の首筋へ舌を這わせた。すべすべした藍の素肌が、神崎の舌の感触を酔わせた。二十歳という年齢が醸し出す滑らかな肌、そして若さを主張す

るかのような張りのある皮膚。神崎は、藍の肉体に陶醉していく自分を発見した。首筋から、ゆつくりと耳たぶへ、そしてうなじへと愛撫を続ける。

「あつ・・・」

藍の口から吐息が洩れた。藍の、神崎の左腕を掴んだ手に力が入っていた。神崎は、自分の左手で藍の右手を握ると、指を絡ませて徐々に力を入れていった。

藍もそれに答える。

神崎の舌が、鎖骨から隆起した胸の方へ進んでいった。右手で包み込むように左の乳房に触れた。

藍が、ぴくりとからだを反応させる。

思ったとおりだ・・・

藍の乳房は、弾力があり、それでいて柔らかさを備えた完璧な乳房だった。そして、感度も抜群にいいようだった。

ゆつくりと乳房を揉みだいた。人差し指と親指で、つんと尖った乳首を摘まんで、そっと引っ張る。

「ああつ・・・」

藍が小さく嗚咽を洩らす。乳首の感度もいいようだ。

神崎の舌が、ゆつくりと乳房の膨らみへと進んでいった。乳房全体を、唇で愛撫しながら、舌先を乳首に当てる。

藍の、神崎を掴む手に力が加わった。

神崎は、藍の太腿の間に自分の太腿を割り込ませ、少しずつ脚を開かせていった。舌先で、藍の乳首を廻すように舐めていく。その次に、口を大きく開けて、乳房を含み、口の中で乳首を舌で転がした。神崎の右手は、五本の指全部を使って、左の乳房を揉んでいた。脂肪の塊とは思えないほど、艶があって滑らかな感触が指に伝わってくるような乳房の皮膚。柔らかいのに、指で押すと、跳ね返すように張り詰めた弾力。こんな素晴らしい乳房を手にするのは何年ぶりだろうか。神崎は、右手を彼女の乳房から脇腹を伝って、縊れたウエストへと這わし、そして太腿の外側へと進めた。神崎が指を這

わずごとに、藍は小さな嗚咽を洩らす。

神崎の下腹部が大きく跳ね上がって、藍の腿を圧していた。神崎の腕を握っていた、藍の右手が、神崎の下腹部へと伸びてきて、手の中に包むようにそれを握った。

「素敵、気持ちいいわ。とっても気持ちいい」

藍が、瞳を潤ませながら、神崎をまつすぐに見つめて言った。幸せそうな、願いが叶ったといったような、そんな表情だった。神崎の右手が、内腿へと這っていく。藍の腿に緊張が走った。柔らかい内腿から、小さく膨らんだ陰毛のあたりへ指が達すると、藍は少しからだを仰け反らせて喘いだ。

「ああっ・・・いい、いいわ」

驚が気持ち良さそうに唄っているような、そんな声だった。神崎は、陰毛を撫でるように触りながら、人差し指と中指を徐々に下へ進めていった。藍のからだがますます仰け反る。脚がゆっくりと開いていった。神崎の下腹部を包む手に力が入っていき、上下に動かし始めた。神崎のそれは、大きく、そして硬く、遅しくなっていた。

「欲しい・・・」

「まだ、ダメだよ」

藍の甘えるような声に、神崎は優しく嗜めた。挿入するにはまだ早かった。もっともっと、藍の美しいからだを、隅から隅まで堪能したかった。

神崎は、右手の指を、藍の薄く生え揃う陰毛から割れ目の方へ這わしていった。小さく突起しているマメのようなクリトリスを指の表面で、こりこりと押していった。

「そこは・・・そこはダメ！」

切れ切れに、喘ぎ声とともに藍は神崎に訴えた。うつすらと目を開き、神崎をいとおしそうに見つめている。神崎は、左の乳房を大きく愛撫しながら、右手は藍の陰部の奥へと進めていく。クリトリスを指の肉で撫で回しながら、中指を割れ目の中へと忍ばせていっ

た。

濡れている・・・

藍のそこは、もう既に溢れるばかりの粘液に包まれていて、ちょっと指を入ただけで、指は粘液に包まれ溶け込んでいった。

凄い・・・ここまで濡れるなんて・・・

「す、凄いわ。こんなに濡れるの、はじめて・・・」

藍は、神崎の思いを察してか、恥ずかしそうに言った。

「素敵だよ」

神崎は、乳房から唇を離してそう言うのと、今度は、上体を浮かせて脚の方へ向きを変えながら、唇を徐々に下の方へ滑らせていった。「そこは・・・」

藍は、言葉にならずに仰け反っていった。神崎は、お構いなしに、舌を腰から陰毛の方へ滑らせ、陰毛の生え際をそつと舐めていった。藍の右手は、神崎のペニスを握って、上下運動を激しくしていった。この藍の動きも気持ち良く、神崎は自分の愛撫に集中してないと、自分がいつてしまいそうになる。

右手の中指は、膣の中の奥へ奥へと入り込んでいった。

細かい襞が指全体に、まるで生きているように纏わりついてくる。そして、鼓動のように波打って、指を締め付けてきた。

な、なんという・・・

神崎は、その締めまり具合と、生き物のような膣の動きに感嘆した。「素敵い・・・いきそうよ、お願い、きて・・・」

藍も絶頂が近づいているらしい。しかし、神崎は、まだ挿入するつもりはなかった。

神崎は、舌を陰毛の生え際からクリトリスの方へ滑らせ、舌の先でクリトリスを軽く突つついた。

「はあっ・・・いい、いいわ。感じる。感じすぎちゃう」

悲鳴に近い喘ぎ声を出し、藍はますますからだを仰け反らせていった。

藍の言葉どおり、藍の膣からは溢れるばかりの愛液が、神崎の口

元を濡らしていった。

すごい・・・こんなに濡れるなんて。

神崎は、舌の力を徐々に強くしていった。唇を使って外側に開いた肉襞を摘んでは引っ張った。そして、舌で内側の襞を大きく舐めていく。藍が、自分のからだをくねらせて、神崎の下腹部に近づくと、握っていた神崎のペニスを口元にもっていった。藍は、自分がいつてしまうのを防ぐかのように、神崎のペニスを口に入れて、舌で亀頭の部分を舐め始めた。包み込むように、舌を巧みに動かし、先から根元まで、上から裏側まで、小さな舌が忙しく動く。そして、すっぽりと口の中に入れると、頭を上下に動かしながら、口を締め付けていった。これは快感だ。このままだと、オレもいつてしまふ・・・神崎も負けじと、藍のヴァギナを舌で舐め回しながら、唇で襞を優しく引っ張っていった。

「ああっ、も、もうダメ・・・早く入れて」藍がたまらず、ペニスから口を離すと、叫ぶように言った。

神崎は、膣の中を動き回っていた指をゆっくりと抜き、藍のヴァギナ全体を名残惜しそうに舐めてから、自分のからだを藍の上に重なるように覆い被さって、藍の両足を少し持ち上げた。

「きて・・・」

藍が目を開いて、神崎をすぐるようにつめた。神崎は、大きく膨張した自分のそれに手を添えて、ゆっくりと藍の中へ沈んで入った。

「ああっ・・・素敵・・・もっと、もっと・・・」

神崎のペニスは、藍の粘液に包まれながら、静かに藍の膣の中へ突き進んでいく。

神崎が、藍に覆い被さって、唇を激しく吸った。藍もそれに答え、神崎の口の中に舌を入れてくる。

思ったとおりだ・・・

藍の膣は、とても締めりが良く、中の襞が神崎のペニスに絡み付いて放さない感じだった。藍の腰が小さく動く。神崎は、ゆっくり

と腰を前後に動かし、奥へ奥へと進めていった。

「はあー」

神崎が大きく溜め息を洩らす。この表面に絡む感じ、締め付ける強さ、藍の喘ぐ声、藍の腰の動き、全てが神崎にとって新鮮で、神崎の到達を促していた。

この分だと、自分が先にいつてしまう・・・

神崎の腰の動きが徐々に速まっていく。藍の、つんと上を向いた乳房が、それに合せて上下に揺れる。

「ああー、いきそう・・・もう、いきそうよ・・・」

藍のからだは、ますます仰け反り、頭が反っていった。

「こ、こっちもいきそうだよ」

神崎の息遣いも荒くなる。

「お願い、いくときは一緒に・・・ねっ？　一緒よ」

「ああ」

そうだ！　つけ忘れている。このまま自分も一緒にいくわけにはいかない。

神崎は、それを思い出したが、既に遅かったようだ。

「ああっ・・・もうダメ・・・」

藍が大きく仰け反ったかと思うと、ぐったりと力が抜けて、ベッドのシートの中へ沈んでいった。

それと同時に、神崎の睾丸が上に小さく移動し、その直後、光のような速さで、神崎の中心部を駆け抜ける感触があった。

神崎は、藍がいったのを目で確認しながら、咄嗟にペニスを抜いて、藍の上に覆い被さった。

間一髪だった。熱い情熱が、藍の腹部に、藍の肌に溶け込むように流れた。ふたりの息遣いは荒かった。藍の乳房が大きく揺れている。神崎の頭は、藍の心臓の鼓動を吸い込むように右の乳房の上に乗っている。藍の両腕が、神崎の頭を優しく抱いた。神崎は、藍の高鳴る心臓の音を聴きながら、思いがけない幸福に浸っていた。

「素敵だったわ。物凄く気持ちよかった」

藍が、囁くように言った。そこには、満足感と充足感があった。

「オレも、年甲斐もなく興奮した。凄く、気持ちよかったよ」

「よかった・・・」

「重い？」

神崎は、頭を持ち上げて藍に訊いた。藍は首を振って、

「もう少し、このままでいて？」

神崎は、黙って頷いて、再び藍の乳房の上に頭を置いた。藍は、その頭をいとおしそうに抱きしめている。

「やっぱり、わたしの目に狂いはなかったわ」

「えっ？　どういうこと？」

「あなたは、思ったとおり素敵な人だったってこと」

藍が、天井を見ながら、はにかんで言った。

「それって、セックスのこと？」

「勿論それもあるけど・・・それだけじゃないわ」

神崎は、藍の胸の上から離れると、横に滑るように並んで、からだを横たえた。肘を立てて、藍をじっと見つめると、

「意味深な言い方だね」

「そうかしら？　神崎さんの抱き方は、ただのセックスじゃなかったわ。あなたは意識していなかったかもしれないけど、相手に、思いやりがあつて、相手を悦ばせることを優先させてた。とっても紳士的なセックスだったわ」

そんなに男を知っているのか・・・神崎は、藍の言葉にちよつとした疑念を抱いた。

「やっぱりセックスのことじゃないか」

「男の人のセックスって、性格が出ると思わない？」

藍が、神崎の方を向いて笑った。神崎は首を傾げて、

「どうかな？　他の男の抱き方なんて知らないからなあ」

藍はくすくす笑って、

「神崎さんらしい答え方だわ」と言った。

「でも、ひとつだけ言えるのは、一緒に気持ちよくなりたいてこ

とかな」

「やつぱり・・・思ったとおりだわ」

神崎が何か言おうとしたとき、藍が喋りだした。

「わたしの前のカレ、同じ年だったから、セックスは自分本位だったの。こんな気持ちのいいセックスをしたことはなかったわ」

「前のカレ？」

「ええ。十七のとき、カレに誘われてデイズニールンドに行ったの。それがはじめてのデートで、はじめてのセックスだった」

「それまでは、男と付き合った経験は？」

「ないわ。中学二年の時、部活の先輩から告白されて、憧れてた先輩だったから嬉しかったんだけど・・・」

「つきあわなかった？」

藍は黙って頷いて、

「その先輩、中学三年間で、何人の女とやれるか、仲間と賭けていたみたいで、それを知ったとき、男ってほんと嫌な生きモンだと思っただわ」

「なるほど、そういう男も世の中にはいるかもしれないね。でも、本気になる前に判ってよかったじゃない」

慰めになっていないな、と神崎は思った。こういう身の上話は時々聞かされることがある。そのときのリアクションは、そのときによつて違うが、相手を悪く言ったり、変に慰めたりしても白々しいだけだと思い、あまりコメントをしないことにしていた。

「彼は、高校の同級生？」

藍は小さく首を振って、

「十七の時、渋谷で声かけられて、カッコよかったからついてったの。そのあと、デイズニールンドに一緒に行つて、それからつきあうようになった。わたし、バージンだったのよ。最初、すごく痛かったから、何度も止めてつて叫んだんだけど、カレ、絶対止めなかった。最初は誰だつて痛いんだ、我慢するもんだつて言つて、絶対やめてくれなかった。わたし、涙がとまらなかったわ。そのうち段

々気持ちよくなるって言って、その次の時も痛かったけど、カレは止めなかった。でも、カレとのセックスでほんとに気持ちいいって感じたことは・・・たぶんなかったと思う」

「そのカレとは、どのくらい付き合ったの？」

「一年くらいかな。でも、別れる前の三ヶ月くらいは、セックスしなかった。なんだか、セックスが嫌いになりそうで」

「嫌いになった？」

神崎は藍を覗き込んで訊いた。藍は、恥ずかしそうに目を逸らすと、

「意地悪な質問だわ」と言った。

神崎が何か言いかけたとき、藍のお腹が小さく鳴った。神崎ははにかんで、

「お腹すいたね。何か食べようか？」

藍は照れたように微笑むと、「聞こえちゃったね」と言って頷いた。

2

ルームサービスが運ばれてきた。

午後十時を少し廻っていた。窓の外は、雨雲がすっかり晴れて、星空に、みなとみらいの夜景が輝いていた。

「赤ワインを勝手に選ばせて貰ったけど、大丈夫かな？」

神崎は、運ばれてきたワインをデキャンタに移しながら言った。空腹を覚えたふたりは、藍が先にシャワーを浴び、その間に神崎がルームサービスで、赤ワインとオードブルを二品、軽食としてサンドウィッチをオーダーしていた。

神崎がシャワーから出てくると、タイミング良くルームサービスが運ばれてきた。神崎は、ルームサービスに開けて貰った赤ワイン

を、デキャンタに移しながら、ワインと一緒に運ばれた、ボルドー型の大きなワイングラスにワインを注いだ。

藍は、バスローヴ姿で神崎の隣に來ると、神崎の仕種をじっと見つめていた。

「今日は、スタンダードに、フランスワインにしてみたんだ」

神崎が、藍に微笑みながら言った。

「何ていうワインなの？」

「ホテルのルームサービスは、あまり種類がないから、なかなか飲ませたいワインが見つからないんだけど、それでもこれは飲ませたいワインのひとつなんだ。シャトー・オー・ブリオンっていうんだけど。八十年ものがあるって聞いたんでそれにした。コクがあるんだけど、軽やかな飲み口で優雅な感じがするから、ワインを飲み慣れていない人でも美味しいと思う」

神崎は、ワインを注いだグラスを藍に持たせて、自分のグラスと合せた。

「再会に・・・」

神崎はそう言って、グラスをゆっくり廻しながら口を近づけた。芳醇な香りが鼻腔を刺激する。ワインレッドがグラス越しにきらきら輝いていた。

「美味しい！」

藍が、少しワインを口に含んでそう叫んだ。神崎は嬉しそうに微笑むと、

「よかった」と呟いた。

「ワインに詳しいんですね」

「好きなだけさ」

そう謙遜しながらも、悪い気はしなかった。

神崎は、確かにワインに詳しい。特に赤ワインには愛着がある。ソムリエとまではいかないが、その辺のワイン通には負けない自信があった。

テーブルの上には、五種のチーズが規則正しく並んでいる、盛り

合わせとローストビーフがある。サンドウィッチは、野菜サンドと牛のヒレ肉のサンドだ。どれも、コクのある赤ワインに合うオードブルを用意している。藍は、チーズをほおびながらワインを味わっていた。神崎は、ワイングラスをテーブルの上で廻しながら、そんな藍の姿を微笑ましく見ていた。

「このワインは、デキャンタに移すのが、美味しい飲み方なんだ」
そういいながら、ワイングラスの中に、持ってこさせた氷を一つ入れた。

「氷を入れるの？」

藍は不思議そうにそれを見て言った。

「赤ワインは、普通室温がいいとか、人肌がいいとか言われているけど、オレは、ほんのちよつと冷えていた方がいいんだ」

勿論、赤ワインなので、ワインクーラーは持ってきていない。また、そこまで冷やすと、赤ワインは味が損なってしまう。

神崎は、美味しそうにワイングラスを回しながら、

「わからないことがあるんだ」

と、藍を覗き込んだ。

藍は、グラスをテーブルの上に置いて、首を傾げた。

「私のどこが気に入ったのだろう？ 何故、ここまで・・・」

「軽い女に見えたかしら？」

藍は、意地悪そうに神崎を覗き込んだ。

「軽いとは思ってないけど・・・」

「ほんとぉ？」

藍が疑うような口調で、更に神崎を覗き込む。

「けど、随分大胆だなんて思ったんだ」

「自分に正直なだけです」

藍は、何でもないことのように言った。

「君は・・・」

「藍って呼んでください」

「ああ、藍・・・ちゃんは、最初にタバコ屋で会った時に、私を自

宅に誘ったね？ そんなに簡単に・・・」

「男を家に入れるのかってこと？」

「えっ？ まあ・・・そういうことかな」

藍は、可笑しそうにくすくす笑って、

「あの日は、神崎さんの洋服がびしょ濡れだったから、それを心配して言ったんです」

「それだけ？」

藍は、にっこりして頷いた。

「でも、私が君・・・藍ちゃんの家に入った途端、狼に豹変するかもしれないとは思わなかったのかな？」

「あのときは、そんな人には見えなかったわ。でも、もしそうなくても、わたしは構わないと思ったけど」

藍は、澄まして言い放った。つまり、神崎が藍の申し出に従って、藍の部屋に入り、藍に迫っても藍は受け入れたということなのだ。

この子は一体どういう子なんだろう？ 何を考えているのか、神崎には理解できなかった。

「女って、直感的に男の人を見抜くものなんだと思うわ。外見もそうだけど、内面から出てくる真摯な性格って、表に出るものじゃないかしら」

「でも、くだらない男に騙される女が多い」

「それは、見抜けないからよ。表面上のカッコよさや、お金や、ルックスで男を選ぶからだわ」

二十歳にしてはしっかりしている、と思わないではない。いったいどんな生活をしているのだろう。

「わたし、高校のとき、くだらない男とつきあったから、それから男をじっくり見るようにしたの。そしたら、段々見えてきたのよ」

「何が？」

「この男は危険かどうか、わたしをセックスの道具としか見ていないのかどうか、ってことかな」

「わかるの？」

「だいたい・・・ですけど。勿論、自分の好みもあるから、遊びだとわかっていても、のめりこんじゃうときもあるけど」

つまり、自分は好みだったわけか、と神崎は少し納得した。

しかし、神崎にしてみれば、藍を好きになろうとも、遊びには変わりはない。既婚者の神崎にとっては、藍は真剣につきあおうとも、愛人でしかない。

まさか、オレのことを独身だと信じているのだろうか？

「でもオレには・・・」

「妻も子供もいる、って言いたいんでしょう？」

「えっ？ あっ、ああ。そうだけど・・・」

「そんなこと承知しているわ。だから言ったでしょ。好みもあるって」

藍は、涼しそうに言った。

つまり、彼女は、相手に妻子があるうと、それが不倫であろうと、くだらない男でなければ、そして自分の好みと合致していれば、積極的にアプローチしてゆく性格だったのだ。

神崎は、ますます藍に興味を持っていった。

神崎は、デキャンタのワインをふたつのグラスに注いでから、もうひとつの疑問を投げかけることにした。

「オレの自己紹介は、遅まきながら後でするとして、君は先日自己紹介をしてくれたね？」

そうだっけ、というように藍は首を傾げた。

「君は、職業は秘密だと言った。何故だい？」

「えっ？」

神崎の意外な問いかけに、藍は戸惑った表情を初めて見せた。

「いや、言いたくないなら言わなくていいんだ。二十歳のわりに、君があんまりしっかりしているから、何をしている人なのか気になっただけなんだ。無理に聞こうとは思わないから、言いたくなければいい」

「言いたくないわけじゃないの。人に言えない仕事をしているわけ

ではないから。でも・・・」

「でも？ 教えたくない・・・？」

何故だ・・・

藍は、ゆっくりと首を振って、

「そうじゃなくて、誤解されたくないから」

「誤解？ どういう？」

藍は、少しの間考える表情をしてから、

「隠している方が怪しいかもしれないわね。わたしは、実は、銀座のクラブで働いているの」

ホステスか・・・別に隠すようなことではない。

「ホステス、でしょ？」

藍が、小さく頷いた。

「それが、何で誤解するんだ？」

「違うの。あなたに近づいたことで、お店に勧誘していると思われなくなかったから・・・」

なるほど。銀座でホステスをしていると言えば、どこの店か、男なら訊くはずだった。店の名前を告げれば、当然行かなければならなくなる。それを配慮して、彼女は勤め先を告げなかったのだ。

神崎は、藍の健気な性格にますますのめり込んでいくのを意識していた。

オレは、この女に本気になるかもしれない・・・

「なんていうお店？」

藍は首を振って、

「ほらっ、やっぱり訊いた。お店に来てくれなくていいわ」

「こうなったから行くって言うてるんじゃないんだ。オレも、銀座にはよく飲みに行くから。接待でも使っし・・・そういう意味で知っておきたいと思っただけなんだ」

藍は、それでも首を振って、

「そのうち教えるわ」

と、頑なに教えようとしなかった。

「それより、ワインをもう少し飲んだら、もう一回しよう？」

藍が、ねだるように神崎を覗き込んだ。四十歳を過ぎて、めつきり淡泊になった神崎だったが、藍のピュアな表情と甘えたような鼻にかかった声を聞いた途端、下半身が反応し出したのを感じた。

きらきら輝いたワイングラスを通して、藍の肌が妖しい光を醸し出しているのを、神崎は幻想の世界に身を委ねるように酔いしれていた。

【続く】

第4章 黒い影

1

三田村浩司は、ビールのグラスを口から離して、あんぐりと口を開けた。

信じられない、と言いたそうな目をして、グラスをテーブルに置くと、深い溜め息を吐いた。

だが、こんな気持ちにさせられるのは一度や二度ではなかった。

三田村は幾度となく、こんな虚しい思いをさせられたことがある。

神崎俊之は、そんな三田村の表情を見て満足そうに、にんまりと微笑んで小さく頷いた。

彼は、三田村のそんな表情が嫌いではない。

「会って二度目って言ったんですよね？ その間に電話で話すとか、メールのやりとりが頻繁にあったとか、そういったことは全くなかったってことですよね？」

「ああ」

神崎は、くどいなという表情を作りながらも、満更ではない顔つきで返事を返した。

「まあ、それはそれでいいとしても、相手から誘われたっていうのは、どうしても納得いきませんよ」

三田村は、いかにも面白くなさそうに口を尖らせた。

目の前のビールが急に不味そうに見えてきた。

「まあ、そういきり立つな」

神崎は余裕の顔つきで、笑いながら喉を鳴らしてビールを一気に飲み干した。

ふたりは、銀座七丁目にある「しちりん」という居酒屋レストランにいた。昨夜の十一時過ぎに、会社に残って仕事をしていた三田

村を電話で捕まえて神崎の方から誘った。いつものことである。

三田村は仕事が忙しいと言って、一度は断ってきたが神崎が半ば強引に、そしていい話があると言ってその気にさせて呼び出した。

神崎が三田村と会うのは二週間ぶりだった。

七月七日月曜日、七夕の夜だった。

生憎、今日は朝から雨模様で、梅雨明け宣言が早かったのではないかと思うほど、一日中鬱陶しい雨が降り続いた日だった。

しかもその雨は、初夏の蒸し暑さを緩和する手助けすらなかった。

新橋駅で午後七時に待ち合わせて、ふたりはこの店に七時過ぎに入った。

最近、この手の居酒屋風レストランが増えた。店内の雰囲気は基本的に、料理は、和食は勿論、日本食の食材をイタリア風や中華風にアレンジして出してくる。酒も、日本酒、焼酎、ワイン、ウィスキー、カクテルまで注文できるようになっている。価格もリーズナブルで、店内は清潔感が溢れていて、デートにも最適だった。個室風に区切られていたりするので、隣の客も気にならない。

人気がでるのも頷けた。

今日も月曜日にもかかわらず、この時間でほぼ満席状態だった。

新橋駅で落ち合うなり三田村は、週の初めにもかかわらず呼び出された不平を皮肉ったが、神崎はまるで動じていなかった。

フリープランナーとして働く神崎には月曜も金曜もないのだが、それにも増して神崎が動じなかったのは、本当に三田村が忙しかれば断ってくるからだ。

本音を言い合える仲、遠慮しない関係を自負する神崎にとって、待ち合わせ時間にきちんと現れる三田村は、今日はこうして会うことに何の問題もないことを物語っていた。

ふたりは、ビールでとりあえず乾杯したあと、近況報告のような会話が展開されていた最中、神崎が藍という新しい女ができたことを三田村に話したのである。

それは、神崎がこのあと、藍の勤める店に三田村を連れて行くための伏線でもあった。

「偶然の出会いってあるもんですね」

などと、余裕で話を聞いていた三田村だったが、神崎と藍の出会いから今の関係までを聞いた途端、三田村は目を剥いて不愉快そうな顔をした。

仕事で疲れている上に、いい話というから来てみれば、神崎の単なる自慢話かと、三田村は半分腐っていた。

「どうして、神崎さんは昔から、そう簡単に女をモノにできちゃうんですか？」

三田村は明らかに面白くなさそうだった。そして、そんな嫉妬と羨望の視線を浴びることが神崎のプライドを持ち上げさせた。

三田村とは、十数年来の親友である。年齢は、三田村が神崎より五歳年下の三十七歳ではあるが、年齢差など気にしないつきあい方をしてくる三田村に、神崎は好感を持っていた。ふたりの出会いは十二年前に遡る。同じアパレルメーカーの販売助成部という部署で一緒に働いていた同僚同士だった。

神崎の方が、三田村より五年ほど早く入社していて、三田村が中途入社したときに、上司として業務指導をしたのが神崎である。ふたりはすぐに意気投合し、上下関係を超えて、公私でつきあうようになった。その後、不景気の煽りを受け、会社の業績不振とともにリストラが断行された。仲間が次々と退職してゆき、三田村もその波に逆らえず、希望退職という形で会社を去ることになった。五年前のことである。

三田村が退職して一年後、神崎も再生できない会社に見切りをつけて退職した。当時は、独立する意志はなかったが、不景気で再就職もままならず、結局周囲の勧めもあって、プランナーとしての独立を選択した。

神崎と三田村のつきあいは、お互いに良き理解者として、その後も続いていた。もっとも、神崎が三田村より五歳年上ということも

あり、現在でも神崎が三田村を面倒見るような感じではあった。

現在は、神崎はフリーのプランナーとして、有限会社「プリズム・プランニング」を設立して事業を行っている。一方、三田村は、アパレルメーカーを退職後、すぐに転職して、中堅不動産会社で広報マネージャーをしていた。

稀に、三田村が神崎に仕事を依頼することもあるが、神崎にとっては、三田村はクライアントでもあった。三田村は、神崎に対して尊敬に値する気持ちを持っていることは確かだった。いや、崇拝と言っても過言ではないかもしれない。神崎が今でも三田村の面倒を親身になって見ていることもあるが、それ以上に神崎の生きかた、考え方に三田村は共鳴し、崇拝していたのだ。神崎も、そんな三田村の態度に弟のような感覚を持っていたのかもしれない。苦楽を共にした仲でもあり、また良きライバルでもあった。

「どういう女なんです？」

面白くないながらも、三田村は関心を示して、話を聞きたがってきた。

「銀座の飲み屋に勤めている女だ」

「水商売ですか？」

いくらかホツとしたような表情を三田村は見せた。

「ああ、そうだ。最初は知らなかったし、なかなかそれを言わなかったんだが、やっと聞きだしたんだよ」

「最初の出会いが、雨宿りをしたときっていうのがドラマチックじゃないですか」

三田村は上目遣いに神崎を見て、ビールを一気に煽った。

神崎は、まあな、と言いながら三田村のグラスにビールを注いだ。昔から神崎はモテた。結婚しているものの、浮気相手や愛人を絶やしたことがなかった。クラブやスナックでも、ちやほやされるのはいつも神崎の方で、三田村が神崎よりモテたことは、振り返ってみても記憶にない。だが神崎は、三田村がもてないとは思っていなかった。女に対するアプローチが下手なのである。ただ、三田村は、

神崎に比べて真面目なので、相手に対して重く感じられてしまう傾向がある。その辺が、女を簡単にモノにできない原因ではないかと、神崎は感じている。

常々、神崎は三田村に、「もっと気軽に遊べよ」と忠告していた。三田村は、身長百七十センチ、体重五十七キロの細身である。神崎と並んでいると、兄弟かと訊かれるほど、はたから見るとよく似ているらしい。性格は、神崎のクールで落ち着いた雰囲気とは反対に、三田村は周囲を笑わせて楽しませるという、サービス精神旺盛な性格だった。どちらかというと、三田村の方が、女受けがよさそうだが、確かに受けはいいが、実際モテるのは、神崎の方だった。ルックスの違いがそこまで差を生むとは思えないが、現実に大きな差があることは確かだった。神崎が三田村に嫉妬されているのは、女に限ったことではなかった。

神崎は、四年前に独立して、現在では年収二千万の生活を送っている。反面、三田村は、相変わらずサラリーマンで、年収七百万の生活だった。

神崎の存在は、よくいえばライバルであり憧れだったが、一歩間違えば妬みの対象だった。勿論、三田村と神崎の関係は良好である。三田村にしてみれば、神崎は憧れであり、ライバルであり、目標なのだ。そして、神崎は、その期待というか、イメージを壊さないように努力し、実力をつけていく存在を心がけていた。

神崎にとっては、三田村はなくてはならない親友であり、確かに社会的地位に違いはあっても、神崎はそれを鼻にかけるわけでもなく、あくまで対等な関係を維持していた。いや、時には、三田村は神崎のクライアントであり、神崎は三田村を「さん」づけで呼び、接待することさえあった。

三田村は、プライベートのときは、五歳の違いを意識していない。それが神崎にとってありがたかった。

お互いに信頼し合っているといってよかった。

だからこそ、神崎は自分の浮気話しも彼にできるのである。

「で、何回くらい寝たんですか？」

三田村がふてくされて訊いた。面白くないという表情を作りながらも関心を寄せている。いや、つつこんで訊くことによって、神崎が得意げに話すことを予測し、神崎の気分をよくすることに徹しているのかもしれない。

三田村はそういう男なのである。気遣い、気配り、神崎を気分良くさせる術を知っている。

「まだ一回だけだよ」

「まだって・・・よく言いますよ」

三田村は、手酌で自分のグラスにビールを注ぐと一気に飲み干した。神崎は、ビールから日本酒へとうつっている。

「で、二度目の出会いは、神崎さんが呼び出したわけですね？」

「そうじゃないさ。最初的时候は送って行っただけで連絡先など訊かなかったからな」

「じゃ、どうやって・・・」

と、三田村が身を乗り出したところへ、頼んだ刺身とほっけが運ばれてきた。神崎は熱燗を一合頼んで、店員に何やら囁いていた。

「このマネージャーがまた可愛い子なんだよ。今日、おまえに紹介してやろうと思ったんだが・・・休みらしい」

残念そうに神崎が話した。三田村は、少しだけ興味を示したようだが、すぐに話を戻した。

「神崎さんは、その子とつきあうつもりですか？」

三田村が、螢烏賊の沖漬けを口に入れながら訊いた。

「ああ、いい女だからな」

何故、独身のオレがもてずに、妻帯者の彼がもてる・・・三田村の常套句だったが、現実にそうだから仕方なかった。

神崎は、三田村の態度を愉快そうに眺めていたが、三田村にとって神崎の浮気話が実はとても間が悪い話題であることを自覚していた。

三田村が、ここまで神崎に嫉妬するのは、実は理由があった。

「そういえば、この前言ってた女はどうなった？」

神崎が、話の矛先を変えてきた。

「麻梨ですか？」

「そんな名前だったな」

「どうにも・・・」

三田村は言葉を濁した。そう、三田村には、それがあつたのだ。神崎同様水商売の女だった。もう、かれこれ三ヶ月以上になる。気に入った女にアプローチして、結局まだどうにもならないのだ。だから、簡単に女を手に入れる神崎が憎たらしくもあり、羨ましくもあるのだ。

「まだか？」

神崎が溜め息をついた。

「オレに気がないのかもしれない」

「そんなことはないだろう。弱気になるな」

今から三ヶ月ほど前に、三田村は会社の接待で、銀座のクラブへ行った。そこで知り合ったのが麻梨というホステスだった。年齢は二十二歳で、世田谷に住んでいると言っていた。

三田村は、そのときのことを思い出して遠い目になった。

激しい雨の降る日だった。接待を上司とともに命令され、好きな映画を観ることを諦めた日だった。

料亭で食事をした。取引先は二名いた。仕事を出す立場をいいことに、散々大きい態度を誇示したのち、価格が高いと因縁をつけてきて、取引はペンディングになった。

相手の、自慢にもならない手柄話を聞いて、今は中学生でも笑わない冗談を連発し、それにたいして引きつった笑いを作る。それだけで三田村は疲れていた。その後、銀座に出て、取引先の紹介で、クラブ「シエル・カルダン」に入った。

担当課長は仕事があると言って帰った。笑えないジョークを飛ばしていた担当部長の案内だった。

取引先には、彼の馴染みのホステスが、三田村の上司にはベテラ

ンのホステスがついた。三田村の隣に座ったのが、麻梨と名乗った新人のホステスだったのである。

アプローチしてきたのは麻梨の方からだった。自分をわきまえている三田村は、ホステスの見え透いたお世辞も軽く聞き流していた。勿論、取引作の前でガツガツした態度は取れない。

熱心に三田村に話しかけ、三田村の携帯電話の番号やメールアドレスを聞こうとしていた。社交辞令、営業スマイルだとわかっているものの、三田村は、麻梨にひかれていく自分を感じていた。

どうせ、営業の電話しかこないのだろう・・・と思いながら、仕方なく教えた記憶があった。

翌日には、昨晚のお礼メールが届いた。

熱心なことだ、と思いながら放っておくと、今度は、映画の誘いを受けた。

どうせ、同伴目当てだろう・・・

そう思って無視していた。すると、店が休みだから、この日にしてほしいというメールが届いた。

同伴じゃないのか・・・

そこで俄然、積極的な意志が出てきた三田村は、指定する日に麻梨が指定する待ち合わせ場所に行った。

彼女はオレを気に入ったのだ・・・三田村は、そう信じて疑わなかった。

麻梨は決して、店には呼ばなかった。三田村の方が気を遣って、店に顔を出すことはあっても、麻梨からねだることは皆無だったのである。

だが、すでに麻梨の虜になった三田村は、徐々に店に顔を出す回数が増えていった。

「だって、プライベートでも会っただろう？　気がないわけないだろうっ」

なりゆきを聞いた神崎は、三田村の肩を叩いて言った。

「おまえ、誘ったのか？」

神崎の言つ、誘つたのかは、勿論からだの関係のことだった。

「ええ」

「何て言ってる？」

「その話しになると、上手くはぐらかされるんですよ」

三田村は、首を捻りながら、なんでかな、と繰り返した。

つまり、麻梨は、三田村と映画や食事やショッピングには行くが、肝心のホテルにはついてこないのだという。要するに、セックスは拒否しているのだ。

だからといって、モノをねだったりすることもないという。

「ヒマつぶしにされてるんですかねえ？」

「そんなわけないだろう。彼女たちだって、そんなにヒマじゃない。それに、同伴や、指名をねだったりしないんだろう？」

神崎も首を捻りながら言った。

「ええ。一度も、同伴をねだられたことはないんです。もっとも、こちらから同伴してあげたことはありますけど」

「最近はどうだ？」

「ここ、三週間くらい会ってないです。なんだか、店を移るって言って、連絡も途絶えてますね」

「いよいよ終わりか・・・と、三田村は考えていた。

「他の女を当たるか？」

「でも、いい女だったから・・・」

「未練が残るってことだな？」

「ええ、まあ」

三田村は、さすがにみみっちいかなと思い、ビールを煽った。

「女の子を紹介してくれて頼んでやるよ」

「誰に？」

「藍にさ」

神崎は、冷酒をちびちび飲みながら、藍を思い浮かべていた。

「今日、これから、あいつの店に行こうと思ってるんだ。三田村に紹介してやるよ。その時、誰か藍の友達を紹介して貰おう」

勝利者の余裕からだろうか、いや、神崎は心底三田村を心配していたのだ。自分だけが美味しい目にあっても話が弾まない。自分の自慢話ばかりでは三田村の酒が旨くない。神崎はそう考えていた。

それに、常日頃から三田村に言っている、「女とは気楽に付き合え」という言葉どおり、落ちない女をいつまでも追いかけることを好まないのである。新しい女を作り、お互いハッピーな人生を送ろうというのが神崎の人生論だった。

もっとも自分に余裕があるから出来る技であることは確かだった。神崎は、藍とシテイホテルで過ごしたとき、頑なに店の名前を言わない藍から、やっとの思いで勤めている店の名前を聞き出したのだ。

三田村は、神崎の誘いによりあまり乗り気な表情をしなかった。おそらく、麻梨にまだ未練があるので、新しい出会いを求めてないのだろう。

また悪い癖が出たか・・・

神崎は、マグロの刺身をつきながら、三田村の表情を見ていた。

「なんていう店なんですか？」

三田村は藍に興味を示した。というより、新しい出会いに期待し始めたのかもしれない、と神崎は思った。

「ルージュという店なんだ。六丁目にある」

神崎は、藍に貰った名刺を思い出しながら答えた。

「ルージュですか。もう、店には行ったんですか？」

「いや、今日、初めて行く」

「そうですか・・・」

三田村は、そう言って、鰯の刺身を食べ始めた。

やはり社交辞令で訊いただけか・・・神崎は溜め息をついた。

その後、ふたりは仕事の話をした。三田村が、近いうちに、広告制作の件で、神崎の協力を請うつもりだと話した。

午後九時半、ふたりは「しちりん」をあとにして、神崎のいうクラブに向かったのである。

2

銀座六丁目の、真新しいビルの地下に、「ルージュ」はあった。一階が美容室になっていて、いかにもホステスといった風情の女がふたり、出勤前の髪をつくってもらっていた。この時間に頭を作るのは少々遅いようだが、きっと七時台は、溢れるばかりのホステスで埋め尽くされているのだろう。

神崎も初めて行く店だったので、多少の戸惑いを見せながらも、先導する足取りで入り口の扉を引いた。

三田村もあとに続く。入ると左に曲がる螺旋状の階段が地下に延びている。壁は上品なクリーム色、蘭の香りが鼻腔をついた。ところどころ壁が四角くくり抜かれ、高級そうな花瓶にカスミソウが飾られている。神崎は一步一步、確実に階段を下りていった。後ろから三田村がついてくる。階段を下りきると、すぐ左に小さな受付カウンターがあり、正面には、十人ほどが座れるカウンター席がある。右手方向に接客フロアが広がっていた。クリーム色の壁に覆われた明るい店内は、三十平方メートルほどあろうか。ソファが三プロツクに区分けられている。

「いらっしやいませ」

黒いスーツを上品に着こなした、五十がらみのマネージャーらしき男が、神崎の前に立った。

「電話した神崎ですが・・・」

神崎がその男に告げた。

「お待ちしておりました。藍さんでしたね。今、仕度をしておりますので、こちらへどうぞ」

神崎が黙って頷いた。

「お荷物をこちらに」

男が神崎の鞆を受け取り、三田村にも手を差し伸べた。三田村は、軽く頷いて、持っていたショルダーバッグを男に預けた。

男がフロアに手を差し伸べた。

神崎は予め店に行くことを告げていたようだ。そういうところは、昔から、几帳面であり、用意周到だった。別の、黒いスーツをあまり着慣れていない感じの若いボーイが、ふたりを席に案内するため歩き出した。店内に客は二組いた。手前のブロックに、五十代のスーツをきちんと着た、会社役員風の男がふたり、四人のホステス相手に話し込んでいた。一番奥には、ポロシャツ姿の三十代と思われる男がひとりで、ホステスとマンツーマンで飲んでいる。会話が進むというより、まったりとした時間を作っている感じだった。

神崎と三田村は、右側の全体が見渡せる位置に案内された。小さなテーブルを前に、神崎と三田村が並んで座った。間髪を入れずに別の若いボーイがおしほりを持ってきて、神崎と三田村に差し出した。更に別のボーイが、小さなテーブルにミネラルウォーターと氷を置いていった。

先ほど、入り口でふたりを迎えたマネージャーらしき男が、神崎の足元に膝をついて腰を下ろした。

「ようこそいらっしやいました。私は森笠といいます」

森笠は名刺を神崎に渡し、三田村にも微笑んで差し出した。明らかに神崎をメインに考えている感じだった。

神崎は名刺にチラッと視線を投じた。

「株式会社 森元商事 渉外担当常務 森笠 貢」と書かれている。三田村は、チラッと名刺に目をやっただけで、興味なさそうにスーツの胸ポケットに仕舞い、店内を見回している。そこへ、薄いグリーンドレスを身に纏った、ロングヘアーのホステスが、三田村の前に立った。

「ミオといえます。こちらのお席、よろしいですか？」

ミオと名乗ったその女性は、につこりと笑うと、三田村の正面のホステス用に用意された、小さな丸椅子に静かに腰を下ろした。

神崎と関係を持った、藍ではなかった。神崎と話していた森笠は、神崎からボトルの注文を取ると、席を離れた。神崎が、三田村の方を向くと、ミオがすかさず、

「ミオといいます。よろしく願います」

三田村に向けた時と寸分変わらない笑顔で、ミオは神崎に会釈をした。

若いボーイがボトルを持ってきて、神崎にその銘柄を見せた。神崎は、軽く頷くと、ボーイはそのボトルをミオに渡した。ミオはボトルの封を切ると、「水割りでもいいですか？」と、神崎と三田村に交互に尋ね、ふたりの了承を確認するとふたつのグラスに氷を入れ始めた。ボトルは、神崎の好みであるバーボンウイスキーだった。

「僕の方は、薄めに作ってください」

三田村が、ミオに声をかけた。ミオは、軽く頷き、グラスのひとつは少なめにウイスキーを注いだ。

「いらしてくれましたかあ。うれしいわあ」

急に、甲高い声が聞こえ、神崎は顔を見上げた。

そこには、薄いピンク色のドレスを身に纏った、あどけなさが残る少女のようなホステスが立っていた。

「迷惑だったかな？」

神崎が、照れたような笑顔を見せて、隣に座るように促した。

ホステスが、神崎の隣に座った。

「迷惑だなんて、とっても嬉しいわ」

ホステスが、神崎にもたれるように耳元で囁いた。

「今日は、友人を連れてきたんだ。三田村って言って、オレの親友なんだ」

神崎が、三田村に向かって話しかけた。ミオと、乾杯していた三田村が、そのとき初めて、神崎の隣に座るホステスを見た。

「この子が、さっき話した藍ちゃんだ」

神崎が、三田村に向かって藍を紹介した。

「はじめまして。よくいらしてくださいました」

藍が、三田村に向かって会釈をした。三田村は、藍を見て目を見張るように、直視していたが、藍に声を掛けられてあわてて頭を下げた。

「ああ、いえ、こちらこそ。よろしく」

「どうかしたのか、三田村？」

神崎が怪訝そうに尋ねた。

「いえ、あまりにも綺麗な人だったので、ちょっと驚きました」

「まあ、お上手ですね」

藍は、恥ずかしそうに笑った。神崎は、納得するように頷いた。

「そうだろう。オレが一目惚れしたんだからな」

そう言って神崎は笑った。

藍がちらつと三田村を見てから、「お上手ね」と、神崎を突っついた。藍を見た瞬間から三田村の態度が変わった。だが、神崎はそれに気づかずに藍と話している。そして、藍の表情も幾分変わったことに神崎は気づかないでいた。

神崎と三田村は閉店の午前零時まで過ごした。その間に三田村が終電の時間が迫っているので帰ると言い出したが、神崎とミオがこぞって引き止めたので、三田村は諦めてタクシーで帰ることをしむし承諾した。

「このあとの予定はどうなっている？」

神崎が藍を誘っている。三田村は横目で藍と神崎のやりとりを気にしながらミオの長い海外旅行話しに耳を傾けていた。

「ごめんなさい、今日はちよつと・・・」

藍が顔の前で手を合わせて詫びている。

「そう・・・」

珍しく神崎が不快な表情をした。三田村は、おやつと思い神崎の顔を凝視した。アフターを断られて表情を変えるような男ではなかった筈だ。

どうしても誘いたい理由でもあるのだろうか・・・？

そんな思いが三田村の脳裡を一瞬よぎったが、自らそれを打ち消した。

「これからごはん食べにいかない？」

隣にいたミオが三田村を誘った。三田村が驚いたようにミオを見ると、

「やっぱり藍ちゃんがいいのかしら？」

と、ミオが拗ねたように三田村を覗き込んだ。

「おまえも藍に惚れたか？」

神崎がミオの言葉に目ざとく反応した。三田村が滅相もないという表情で手を振った。

神崎と三田村が一人の女を取り合ったことは今までに一度もない。微妙に好みが違つと三田村は言い張っているが、神崎にしてみると多分に三田村が神崎に気を遣っているのではないかと思うことがある。確かに三田村の惚れる女に神崎は興味を示したことはないが、神崎が目をつけた女を三田村が関心を示さないはずはなかった。

藍に惚れたか・・・？

だが、藍は既に神崎の女になっている。三田村が惚れたところで藍がなびくわけはなかった。

「ミオちゃん、今日はママにつきあう日じゃないの？」

藍がミオに話しかけた。ミオは苦いものでも口にしたような顔を つくると、

「そうだったかしら」といって、藍から目を逸らした。明らかにミオは藍に敵愾心を持っていた。

今までは四人が和気藹々と話していた筈だった。いつもより三田村の口数が少ないように感じたが、考えようによっては神崎と藍に気を遣つて、ミオとまったりとすることに終始していたのかもしれない。

ない。いや、三田村はミオが気に入ったのだろう。そう考えたが、神崎はそれを自分で打ち消した。

過去の三田村の惚れる女のタイプを考えると、ミオは美人だが三田村の好みとはちょっと違うような気がしたのである。なにはともあれ三田村が麻梨を忘れてくれればいいのだ。そのために連れてきたのだから。勿論、藍に会わせて嫉妬を煽る目的も多少あった。

しかし・・・神崎は首を傾げた。

藍のミオに対する微妙な牽制を不可解に感じていた。

ミオが三田村をアフターに誘った。それはミオが三田村を気に入ったのかもしれないし、藍が言うようにママのお供を回避するために、三田村とママを天秤にかけた故の選択だったのかもしれない。

ミオの選択はともかく、本来ならホステス同士庇い合うものだから、三田村がミオのアフターを承諾すれば、ママのお供を回避できる。ミオの手助けをすることが藍にとって不利になるとは思えない。それとも、ミオがママにつきあわないと、藍が困る理由でもあるのだろうか？

例えば、代わりに藍がママにつきあわなければならなくなる、とか。

ミオと三田村がつきあうことが気に入らないのか。

まさか・・・

神崎は頭を振ってそれを打ち消した。確かに三田村が藍を見たときの目と態度、藍の三田村に対する視線も気になる。そしてもつとも気になっているのが、最近の藍の神崎に対する態度だった。

神崎が藍とシティホテルで一夜を共にしてから、神崎は幾度となく藍に電話やメールを送っていたが、藍がそれに答えたことが一度もなかった。今回店に訪れたのも、そういった背景があったからだ。

まさか・・・

一抹の不安が神崎の脳裡をよぎる。様々な否定が神崎の頭を支配する。

藍は俺に飽きた？

三田村に興味を抱き始めた？

ただの遊びだった？

既に過去の男・・・店に呼ぶための策略・・・

神崎はずっと握っていた藍の左手に力を込めた。

「痛いわ」

藍は、その一言だけ残して、「失礼します」と言っただけで席を立った。

神崎は釈然としない気分のまま、店を出ることになった。ミオも諦めてママにつき合わなければならず、三田村とのアフターはお預けとなった。もっとも、ミオが本心から三田村とアフターしたかったのかは疑問であるが。帰り際、店の入り口まで送りに出てきた藍の態度はぎくしゃくしていた。見送る笑顔も、手を振る仕種も、どれもぎこちなくて、肝心の神崎を見てはいなかったように感じた。

一方、ミオは三田村とアフターできないことを心から残念そうに言い、それを阻止したかのようなセリフを吐いた藍に対して、ミオは幾分憎しみに似た感情を抱いていたようにも見えた。

店を出た神崎は、小さな不信感を抱いたまま三田村を誘った。

雨は既にあがっていたが、空は相変わらずどんよりしていた。午前零時を過ぎているのに蒸し暑く、じつとりと首筋が汗っぽくなってくる。

「もう一軒行くか？」

「今日は帰ります」

即答だった。サラリーマンの三田村にとって、午前零時過ぎまでつきあうこと自体上出来なのだが、今までの三田村の行動から考えると、神崎にとっては不満というより、疑惑の芽が膨らんでいく原因になっていった。

三田村ははつきり断るような男ではなかった。少なくとも、神崎に気を遣い、どうしても帰らなければならぬときは、それをしつこいほどに説明し詫びて帰っていくような男だった。

いったいみんなどうしちゃったのだろう・・・

「そうか。じゃ、気をつけて帰れよ」

神崎は、そういうしかなかった。

三田村は、神崎に礼を言々と躊躇いもなく新橋方面に歩き始めた。店の前は空車と高級車で溢れかえり、とても車が動いているとは言い難かった。新橋駅の近くでタクシーを拾うのはしごく当然だったが、神崎は背を向けて歩きさる三田村に、もやもやした感情を抱かずにはいらなかった。

仕方ない、一人で飲むか・・・

神崎は未練がましく三田村の後ろ姿をじつと見詰めていた。

三田村から麻梨の面影を消すことはできなかったようだ。ミオの誘いにも動じることなく、二軒目に期待を馳せることもなく、彼は帰宅の途についた。今日は彼にとって、あまりメリツトのない日にしてしまったかもしれない・・・

神崎は少し申し訳ないと感じた。

だが、それとは別の感情も神崎の脳裡をよぎっていた。

藍の断り・・・理由を言ってくれるわけでもなく、にべも無いという態度で、神崎のアフターを断った。確かに、別件で用があったのかもしれない。突然会いに行ったので、既に別の客とアフターの約束を済ませてしまったのかもしれない。だとしても、あれが身体を許した相手に対する態度なのだろうか・・・案外、彼女の性格は神崎に近いものがあるのかもしれない。というより、神崎自身が意外にも藍に本気になってしまったのかもしれない。

そして、三田村の態度も気になる。店で藍を見た後の態度もおかしかったが、今の断り方もいつもと違って素っ気なかった。勿論、サラリーマンである彼が、明日のことを考えて帰宅するのは当然といえは当然の判断なのだが、それでもいつもと違う違和感を覚えずにはいらなかった。

じつと三田村の小さくなっていく後ろ姿を見詰めていた神崎は、そのときハツとして目を見張った。そして胸がカツと熱くなるのを

感じた。

自分の目を疑った。

何かの間違いだろうか。いや、間違いない。

見間違えるはずがない……

何故……？

それが疑問なのか、疑惑なのか、もしかしたら嫉妬なのかもしれないと神崎は思った。だが、これを目撃した所為で、ふたつの疑問が氷解したような気がしたが、だが、それよりもっと大きくてシヨッキングな疑問が新たに生まれたと言つてよかった。

何故……？

再び自問自答してみる。

理由がわからないというより、何故そうなったのか思い当たらないという方が当たっているかもしれない。神崎は呆然と立ち竝んで歩けなくなっていた。唇が小さく震えていた。

どうということだ？

「ルージユ」に入ってから店を出るまでの一部始終が走馬灯のように神崎の頭の中を駆け巡った。

思い当たることはいくつかあったが、どれもそれがこんな結果を生むとは思えなかった。

まさか……

もつと以前から？

それはないだろう、あの三田村に限って。小さく、どんどん人ごみの中に消えていく三田村の後ろ姿の横に、急に横から出てきて彼に凭れかかるように寄り添って歩く藍の後ろ姿を、神崎は刺すように凝視していた。

【続く】

第5章 疑 惑

1

男を狂わす女が実際に存在するのだと、神崎は身を持って確信していた。

二度会って、一度抱いただけの女に神崎は身を焦がすような恋をし始めていた。

いや、正確には「気がついた」と言う方が当たっているかもしれない。藍を抱いた後も、「ルージユ」で一緒に過ごしたときも、神崎はいつもと変わらない、気に入ったひとりの女という意識でいたつもりだった。

勿論遊び相手以外のなものでもなかった。

結婚以来、女は浮気相手、遊び相手としか考えていなかった神崎にとって、藍の出現は彼の概念を狂わす存在となっていたのである。いつから本気になっていたのか・・・

自分でも気づかぬうちに藍を遊び相手ではなく、恋愛対象として捉えていたのだろう。

信じられない・・・神崎にとって、妻以外の女は、恋愛対象だが、愛することは決まっていなかった存在だった。いや、今も、これからずっとそうでなければならなかった。

家庭は壊さない。スマートな浮気ができなければ、不倫をする資格がないと、彼は考えている。決してのめり込むことのない軽い気持ちの恋愛、安らぎとセックスを中心に考え、決して相手に本気にさせない遊びの恋を彼は実行してきたつもりだった。

その彼が本気で女を愛してしまった。それも、三度しか会っていない女。一度しか寝ていない女に身の心も奪われてしまったらしい。三田村を笑えない。

あの一夜以来、神崎は藍の虜になってしまったというのか・・・
四十二歳の妻子持ちが、二十歳の小娘にのめり込んでしまったとい
うのか。

いや、そうではない。

自分に惚れていると思ひ込んでいたのに、神崎の誘いを断つて三田
村に寄り添うように夜の街に消えていった藍に、自分の揺るぎない
自信と欲しいものを必ず手に入れてきた実績を微塵に崩されたこと
への悔しさだったのかもしれない。しかも、隠し事を一切せずに自
分に忠実にしていると思ひ込んでいた三田村に、裏切られた衝撃と
藍を横取りされた敗北感に嫉妬心を抱いてしまったのかもしれない。
あれからふたりがどうなったのか考える必要もなかった。

大人の男女が寄り添うように消えたのだ。しかも、神崎の申し出
をふたりがそれぞれ断つていったのだから、ふたりが行き着くこ
ろはひとつしか考えられない。

神崎は屈辱感でいっぱいだった。

三田村を呼び出して真実を訊き出そうかとも考えたが、三田村に
嫉妬しているようで出来なかった。

プライド・・・そうかもしれない。今まで一度として三田村に先
を越されたことのない事実。同じ女で自分が敗北を期してしまつた
という屈辱。藍を本気で愛し始めたのは確かだが、それ以上に三田
村に対するライバル心が神崎の神経を逆撫でることになっていたの
だ。

三田村が自分を裏切ったことも許せないことだった。

あの時の二人の態度から、明らかにふたりは以前から知り合いだ
つたと思われる。それもかなり親密な関係を築き上げていたと言え
るだろう。

何故三田村はそれを自分に隠していたのか・・・

三田村は麻梨というホステスを諦めきれずにいると話していた。
あれは嘘だったのか。

ポーズ？ 藍とつきあっていることを自分に隠すポーズだったの

か？

麻梨というホステスに入れあげて苦悩しているフリをするとは、今までの十数年来の信頼関係はいつたい何だったのだろうか。

これは裏切り以外考えられない行動だった。

店の中で藍と三田村が挨拶を交わしたとき、どうして初対面のよ
うな素振りをしたのだろうか。

神崎は藍だけでなく、三田村さえも信用できなくなっていたので
ある。

モヤモヤした気持ちのまま二日が過ぎた。

あの日以来、神崎は何度も藍に電話をしていた。だが、電話に出
るどころか、必ず留守電に切り替わってしまっている。勿論、三田
村との仲を問い質そうなどと考えていたわけではなかった。藍との
関係を確認するために会いたかったのだ。

メールも送り続けた。しかし返事が返ってくることはただの一度も
なかった。

それが一層神崎の気持ちを暗くさせた。

一方三田村に対しても何もしていないわけではなかった。

仕事にかこつけて会社に電話したこともある。だが、会議中か外
出中といわれ、直接話す機会は全くなかった。三田村の携帯電話に
メールを送ったりもしたが、やはり返事はなかった。

無視……？

裏切り……？ 暗流……？ 嘲笑……？

何故……？

必ずこの疑問が頭をよぎる。

勿論三田村がどんな女とつきあっているのか、すべてを知ってい
るわけではなかったし、三田村が全部自分に話しているとも思っ
ていない。

だから、どこかで藍と知り合い、つきあうことになったとしても、
それを神崎に黙っていたとしても別に構わないのだ。

だが、隠す必要があるとも思えなかった。

俺に気を遣ったのか・・・？

藍の話を切り出したのは神崎自身だった。自分が彼女に熱を上げていることは伝わった筈だ。

その女は自分も知っていてつきあっている、と告げられなくなったのか。

三田村は、確かに隠し事を持たない唯一の友人だが、彼が神崎にたぶん気を遣っていることは日頃の態度からも見てとれた。

特に女のことになると、三田村は一步引いて神崎に譲る傾向がある。これは三田村の女に対するコンプレックスもあるだろう。

逆の考え方もある。確かに三田村と藍はつきあった事実があった。ところが、藍が神崎といい関係を築きだしたので、三田村は自分が振られたと思い諦めた。

だから藍の存在を神崎に告げなかった。

もしそうだとすれば、今回の出来事も領けないことはなかったが、それでも疑問は残る。

藍が三田村から神崎に乗り換えたのなら、何故神崎の誘いを断つて、三田村と夜の街に消えたのか？

あれは明らかに親しい関係同士の態度だった。

藍が乗り換えたと考えるには矛盾があった。

疑問・・・

いや、疑惑といえるかもしれない・・・

根本的な疑問が浮かんた。

まず、三田村が藍と知り合ったきっかけは何だったのか？

「ルージュー」というクラブは初めてだと三田村は言った。これは嘘ではないだろう。何故なら、「ルージュー」は普通のサラリーマンが通えるような店ではなかったからだ。たとえ一度や二度接待で来たことがあったとしても、その程度でホステスを手に入れるほど、彼女たちは軽くない。

勿論、一度で波長が合うことはある。今回の藍と神崎のように・・・

しかし、三田村がそんなに積極的に行動するような男とも思えなかった。

それに三田村が「ルージュ」が初めてである裏づけは他にもある。まず、店の他の従業員やホステスが知らなかったことだ。

藍は惚けられても、他のホステスは口裏を合わせることはできない。マネージャーの森笠にしても、ホステスのミオにしても、三田村に対しては初対面の対応だった。

三田村を忘れている？

それはないだろう。客商売で、一度来た客を忘れることは致命傷に匹敵する。たとえミオが三田村に初めてつくホステスだったとしても、店の中には二十人強のホステスがいたのだ。顔見知りから挨拶されてもおかしくない。

店の女が三田村の来店を神崎に隠す必要はまったくないのである。それに、三田村は店の中をキョロキョロ見回していた。それは初めての証拠ではないのか。

トイレの位置も訊いていたように記憶している。こう考えてくると、三田村が「ルージュ」の常連であることは否定していい。

では別の場所でふたりは知り合った？

神崎はハッとして目を見張った。そういえば、神崎と藍が知り合ったのも店ではなかった筈だ。

偶然の出会い。ないことはない。

どこかで、何かのきっかけで三田村は藍と知り合い、そしてつきあい始めた。

藍は自分がホステスであることを隠していた。三田村に対してもそうしたのではないのか。

三田村は敢えて素性を訊くことはなくつきあっていた。そしてあの日、「ルージュ」で初めて藍がホステスであることを知った。

いや、それも違う。

ストーリー的にはあり得るが不自然であることは否めない。

藍という女の存在を神崎に隠していたことと、店で会ったときの

態度が自然すぎたことだ。

あれは明らかに初対面の挨拶だった。か、知っていて演技をしている態度かのどちらかでないと、あのような挨拶はできないはずだ。演技だとしたら・・・？

何故、神崎の前で演技をする必要があるのか？

神崎は頭を抱えた。ないことはない・・・

二人が事前に示し合わせていたか、曰くつきでないと、あんな態度で接することは不可能だった。

曰くつき・・・？ ふたりに何か隠し事が・・・？

神崎は首を振った。

藍の存在を三田村が神崎に隠していたとしても、「ルージユ」で藍と会った途端に、三田村は必ずと言っていいほどボロを出すはずだった。

あれは自然な、極めて自然な態度だった・・・

やはり三田村と藍が以前から知り合いだったと考えることはできない。

では、あそこで知り合って惹かれあった？

あり得る話だが、では一体どのときに、どういうきっかけで、あんなにも接近する関係になれたのか？

店内ですごした三時間近くの間、常に藍は神崎の隣にいた。それも神崎と三田村の間ではなく、神崎の左隣だったから、三田村と藍が会話しても必ず神崎の耳に入る。神崎と三田村の間にはミオがいて、三田村はミオとずっと話していた筈だ。

俺がトイレに立ったとき？ それもない。神崎がトイレに立ったときは必ず藍が化粧室の前でおしほりを持って待っていた。逆に三田村がトイレに立ったときはミオが対応している。だから、ミオが三田村にアプローチする機会があっても、藍が三田村にすることはできなかった。

百歩譲って、あの場でふたりが惹かれあったと仮定しても、あんなにも親密そうに、凭れ合うように街に消えていくことなどできな

いはずだ。

それは、プレイボーイを自負する神崎でも無理な相談だった。

あれは昨日や今日つきあい始めた関係ではない！

神崎は、三田村と藍が凭れ合うように消えていった後ろ姿を思い浮かべた。

あれは、知り合つてすぐの態度ではない。

藍についてはどうか。三田村と既につきあつていたとしたら、男がいるのにもかかわらず神崎を誘ってきたのだ。

勿論三田村と神崎が知り合いだったなんて、藍にとっては衝撃的だっただろうが、それとは関係なく、男を何人も手玉に取る女ということになる。

そんな女だったとは・・・

神崎は激しく頭を振った。

藍が男を垂らし込む女かどうかは問題ではない。三田村と藍がつきあつていたかどうかも、実はどうでもいいことなのだ。

神崎が拘っているのは、藍が自分をどう思っているのか、ということと、三田村が自分に黙っていた理由が知りたいだけなのだ。

考えても仕方がない。確かめるしかないのだ。

神崎はそう決心すると、「ルージユ」に行くことにした。

2

二週間後の七月二十二日火曜日の午後十時過ぎ。悶々とした時間を過ごした神崎は、意を決して「ルージユ」に向かった。

もっと早く確かめたかったが、取引先から夏季休暇前にプランを提出して欲しいとスケジュールが早まり、神崎は昼夜関係なく企画に没頭していたので、なかなか自由な時間が取れなかったのだ。

「ルージユ」は閉店が午前零時だったので、彼の都合が全く合わ

ない日が続き、イライラは最高潮に達していた。

その間に神崎は、何度も藍に電話を掛け、メールを送り続けた。三田村には、会社は勿論携帯電話にも「メシを食おう」とさり気なく送り続けていた。だが、藍は勿論のこと三田村とも連絡がつかなかった。

七月二十二日は、朝から真夏の猛暑が厳しい日だった。

夜になっても一向に涼しくならない、蒸せるような空気の中、神崎は自分の気持ちに決着をつけるために銀座に向かった。

見覚えのある螺旋状の階段を、重い足取りで一步一步下りていった。

すでに気持ちは整理されていた。

この二週間、仕事に追われながらも神崎は考え抜いた。今回は三田村に出し抜かれたのかもしれない。

藍が三田村とつきあっているのなら、それでいいと思っていた。確かに神崎は藍に本気になっていた。だが、それ以前から三田村と藍がつきあっていて、今後もそれを続けるのなら身を引こうと考えていたのだ。

三田村と一人の女を共有する気にはならない。

藍が三田村との関係を清算して神崎とつきあうと言えば、神崎は受け入れるつもりでいた。勿論三田村とも話し合う覚悟はできていた。

階段を降り切ると、神崎は店内を見回した。自然と藍を探している自分がいたのだ。そして三田村の姿も・・・

二人がいれば好都合だった。事の真相を聞いてすっきりできる・・・そう考えていた。

「いらつしやいませ。先日はありがとうございました、神崎様」
マネージャーの森笠である。

相変わらず黒のスーツに、ポマードで固めた黒髪は前回と変わらなかったが、幾分やつれたように見えるのは、神崎の思い過ごしだろうか。

店内が、以前に来たときよりざわついているように感じた。

火曜日ということもあり、客の入りは半分くらいだろうか。店員も、ホステスも、どこか落ち着きがないように感じるのは、自分が特別な意識で訪れている所為だからだろうか。

「藍さんをお願いします」

挨拶ももどかしく、神崎は早速指名していた。

神崎は自分の声が多少震えているように感じた。席に案内される前に神崎は指名を伝えていた。

「は？」

森笠は戸惑った表情をして神崎を見つめた。

神崎の表情が曇った。本来なら、森笠が自ら「藍ですね」と確認してくるはずだった。そう訓練されているはずなのだ。

やはり何かあるのか・・・

「神崎様、ちよつとこちらへ」

森笠は、神崎をカウンター席に案内し、ゆっくりと椅子を引いて座るように勧めた。

「どういうこと？」

神崎に不信任感が芽生えた。森笠は、そんな神崎の態度にもお構いなしに、神崎を誘導するようにカウンターへと進めた。

神崎は案内されるままカウンターの椅子に座ると、ほぼ同時に横に座った森笠を見た。

「辞めたの？」

神崎から口を開いた。森笠が落ち着きのない態度で口を閉ざしていたからだ。

藍は、神崎から逃げたのか・・・神崎が店に現れることを藍は当然予測できる。自分から逃げたのかもしれない。

「ご存知ないのですか？」

辞めたのだ・・・神崎は確信した。

オレから逃げたのだろう。やはり三田村とはデキていたのだ。

神崎の体内の血液が暴れだすようにざわついていくのがわかる。

三田村のやつ・・・

「本当にご存知ないのですか？」

森笠は声を潜めている。森笠は困ったような表情をして、神崎を見ていた。

「何も聞いてないけど・・・」

念を押す森笠の態度に、ちよつとした不信感を抱きながらも、神崎は素直に答えた。

「新聞やニュースも見えていないのですね？」

「新聞？ ニュース？ ということ？」

森笠の態度から只ならぬ気配を感じ取った。

辞めたわけじゃない？

新聞やニュースを見ていないか、とは随分突拍子もない事を訊くものだ・・・

もしかしたら、藍は何かのトラブルに巻き込まれたのか！

確かに、ここ数日は多忙で、新聞はおろかニュースさえ見ていなかったが・・・それが何を意味するのだろうか？

藍は・・・

辞めたわけじゃないのか・・・

「本人からも何も聞いてないし、新聞やニュースもここんどこ見えていないけど、それと藍がどういう関係が・・・」

神崎は首を傾げながらも、只ならぬ気配に身を堅くした。何か衝撃的な事実が伝えられそうな、そんな気がしてきた。

「藍に何かあったのか？」

神崎はつい詰問口調になってしまっていた。

「藍は・・・」

森笠は言いよんだ。だが、次の瞬間、まっすぐに神崎を見て、

「藍は、先々週の水曜日に何者かに殺されたのです」

神崎は朦朧とする頭で銀座の街を、暗闇を彷徨うように歩いていた。

客引きの黒いスーツを着た男の呼びかけも、キャバクラのチラシを持って微笑みながら声を掛ける若いホステスの姿も、神崎の目には映っていなかった。

自分の足が自分の持ち物ではないような、そんな感覚で歩いていた。

藍が死んだ。しかも殺されていた。

俄かには信じられないことだった。

何故・・・？

いったい誰に・・・？

犯人は捕まっていないと森笠は言った。殺される理由もわからないと、頭を捻っていた。

森笠は藍のいないことを詫びていたが、そんな問題ではなかった。神崎の足は小刻みに震えていた。どこかに入ろう。静かなところでゆっくり座って頭を整理しよう。

家に帰る気はしなかった。賑やかな店に入る気にもならなかった。神崎は、いつもひとりで入るバー「エレガント・ムーンシャイン」に向かった。

このことを三田村は知っているのだろうか？

待てよ・・・

神崎は足を止めた。先々週の水曜日といったら九日だ。神崎と三田村が「ルージュ」に行ったのが七日の月曜日。その二日後に藍は殺されたのだ。

道理で神崎の度重なる電話にも、メールにも反応がなかったわけだ。相手が死んでいれば、電話に出ることもメールを返すことも不可能なのだから。

俺を無視していたわけじゃないのだ。

一瞬、神崎の脳裡に三田村と藍の寄り添う後ろ姿が浮かんた。

犯人は三田村・・・？

まさか。神崎は突拍子もない自分の発想を自ら否定して、また歩きたした。

三田村が藍を殺す理由が・・・

神崎は「エレガント・ムーンシャイン」の重い扉を押して店内に入った。

「エレガント・ムーンシャイン」は、銀座六丁目の小さなビルの地下にあるバーである。七人掛けのカウンター席と、半円の黒いソファ席が三ボックスあるだけの小さなバーだ。カウンターの前には数百種類の酒が飾られている。スコッチ、バーボンなどのウイスキーをはじめ、あるとあらゆる酒が置かれている。裏にはワインセラーもあるという。

マネージャーの暖かい迎えの声を制して、一番奥のボックスに入ると、バーボンのロックとチエイサーを頼んだ。

暫く一人にして欲しいと告げて、思考な中に入ってしまった。

犯人は三田村ではないだろうか。

この推理が神崎の頭から離れないでいた。特に理由があるわけではなかった。三田村と藍が銀座の街に消えていった姿が脳裡をかすめる。

とても仲のいいカップルに見えた。親密さが離れていても伝わってくるような、そんな温かみがふたりには感じられた。

そんな三田村が藍を殺す？

まさか、あり得ない。

いや、だからこそあり得るのだ。

神崎は藍と寝た。三田村が藍と既に付き合っていたとしたら、三田村は藍を責めるだろう。口論の末、三田村は藍を手に掛ける・・・神崎は強く頭を振った。

あいつがそんな簡単に殺すはずがない。

三田村が藍を殺す動機が、そんな簡単な理由であるとはとても思

えなかった。それ以上に、三田村のような男に人を殺すことが出来るとは思えなかった。

しかも、三田村と藍が消えたのが七日の月曜日で、藍が殺されたのが九日の水曜日。二日後に、三田村がわざわざ藍を殺しにくだるうか。

殺すなら七日のうちに殺すだろう。

では何故、藍は殺されたのだろうか？

自分の知り合いが、一度は寝て快楽を共に味わった女が殺されていたという事実は、神崎にとって衝撃的だったし普通の人間には経験できないことだった。

ちよつと待てよ。

もしかしたら自分に疑いがかかるかもしれない。

自分も藍と接触した関係者の一人だ。事情聴取くらいはあるかもしれない。

いや、藍に熱をあげて、しかし友人に寝取られた不幸な男として、俺は殺す動機を持っている！

神崎は愕然とした。自分の方こそ動機を持っていることになるのではないだろうか。

しかも、神崎は何度も藍に電話をかけているし、メールを送信した数も数え切れない。

藍が殺されたのが九日なら、七日に指名した神崎は立派な関係者だった。まさか、アフターに断られたことが動機になるなどと考える刑事はいないだろうが、参考人になることは間違いない。

アリバイがなければ、ただに参考人では済まないかもしれない。友人に愛人を取られた腹いせに殺した・・・警察はそう判断するかもしれない。

神崎はぞくつとからだを震わせた。

先々週の水曜日は、自分はいったい何をしていただろうか？

森笠との会話を思い出してみる。

森笠の話によると、殺されたのは明け方の三時から五時の間だっ

たらしい。あの日、藍は常連客の相手で午前三時まで店にいて、帰り際に裏の通用口の前で刺殺されていたらしい。

つまり十日の早朝ということになる。

神崎は記憶を遡って、自分のアリバイを確認した。大抵は二時過ぎまで飲んでいて、その後タクシーで帰宅する。おおかたその日もタクシーの中だったのではないだろうか。

どこの店で飲んでいたか？ 神崎の思考は目まぐるしく回転していた。

クラブ「f」だ！ クラブ「f」で飲んでいた。証明する人もいる・・・

神崎は、ホッと深い溜め息を吐いた。

だが、クラブ「f」にいたのは、おそらく二時過ぎまでだ。「f」は六本木のロアビルの裏にある。二時過ぎに店を出てから、三時過ぎに藍を殺すことは可能だった。

アリバイにはならない。

そのあと神崎はタクシーで自宅のある三鷹に帰った。自宅に着いたのは・・・

神崎は思考を巡らせた。

三時だ。三時には自宅にいた。証明する者は・・・妻は熟睡していた。自分が帰っても、隣のベッドで静かな寝息を立てていた。

ふたりの子供たちは・・・無理だろう。部活で疲れていて、父親が帰宅した午前三時は夢の中だったはずだ。

俺を三鷹まで乗せたタクシーの運転手しかいないだろう。そのタクシーは・・・

そうか！ 「f」で手配して貰ったから、オーナーの種田に聞けばわかる。

神崎は深い溜め息をついた。

万が一警察の事情聴取があっても大丈夫だ。

さて、俺の不在証明はどうでもいい。俺は犯人ではないのだから。それよりも真犯人の方だ。

「ルージュ」は、三日間の営業停止を余儀なくされ、ひとりひとり事情聴取されたという。

森笠が入手した情報によると、藍は出刃包丁のようなもので正面から腹部あたりを一突きにされたあと、全身をメッタ刺しにされていたという。

怨恨。警察はそう言っ、て、藍を憎んでいる店の従業員や客を当たっているという。

もし藍が男を弄ぶような女だったとしたら、敵は相当多いだろう。「ルージュ」に移籍してから二ヶ月弱、常に成績はトップクラスだったから、同僚の妬みややつかみも相当なものだったかもしれない。神崎は、藍とミオの会話を思い出した。ママのお供を回避したがつっていたミオに、容赦なく突き放す藍の姿が、自ずと周囲の憎悪を買っているのではないかと思えてくる。

犯人はむしろ同僚かもしれない。

メッタ刺しか・・・相当憎まれていたと思える。

森笠は遠慮ぎみに話していた。

他のホステスの指名客を横取りしたこともあったらしい。というより、客が勝手に藍になびいてしまったという。

藍とホステスの間で口論になっている姿も何度か目撃されている。

通常、店はホステス同士のいざこざを防ぐために、どのクラブも「担当制」を敷いている。一度指名すると、他のホステスを指名しても、担当は変わらないから、売上は担当に付くことになる。例えば、客が担当以外と同伴しても、同伴手当てはポイントとしてそのホステスについたとしても、売上は担当のものだった。この制度は、ホステス同士の客の奪い合いを防ぐことに繋がる。

だが、例外もある。客が指名替えを希望したときだ。客が担当をお気に入りホステスにして欲しいと希望すれば、それは聞き入れなければならない。

それを藍がやり続けていたら敵は多い。神崎はもとも藍の客だから問題ないが、三田村は神崎の同伴だから、担当不在ということ

になる。通常、何も客が言わなければ、藍が三田村の担当になるが、三田村が次に「ルージュー」に訪れて別のホステスを指名すれば、そのホステスを担当にする可能性がある。

ミオはそれを狙って三田村をアフターに誘った可能性があり、藍はそれを阻止するために、ミオにママのお供を強要したと予想できる。

ミオのようなホステスが他にも大勢いるだろう。

藍は、多くのホステスから恨まれていた？

ところで、「ルージュー」に来る前はどっただろうか。

藍の本名が中蘭尚子であることを森笠から聞いた。年齢は二十二歳。出身は定かではないが、東北の方だとホステス仲間に話したことがあるらしい。

履歴書の必要がないこの世界では、どこの出身で過去に何をしていたかは、本人が話さない限り明るみにならない。

藍は、年齢は二十歳だと神崎に告げていた。つまり、年齢さえも偽っていたのだ。

ホステスが客に年齢を偽るのは珍しいことではないが、二十歳でも二十二歳でも差ほど変わらないにもかかわらず、それを偽らなければならなかった理由は何なのか？

身元があまりはつきりとしていなかったことが、森笠を不利にさせ、かなり警察に絞られたらしい。

入店のきっかけは銀座でのスカウトだった。その前もホステスだったらしいが、店の名前までは誰一人聞いていない。

前の店でも、同じような客の横取りを繰り返していたとすれば、動機を持った者は倍増する。

自宅はわかっている。横浜のみなとみらいが一望できる西区だったと思う。低層マンションの前まで送っていった記憶があるからだ。あれは本当の自宅だったのだろうか。

家の中に入ったわけではなかったし、愛人がいたかもしれない。愛人か・・・

その可能性はある。愛人との関係が拗れて殺された。よくある話だ。

今頃、愛人のいかにも金持ちそうなどこかの会社役員が、警察の取調室で締め上げられているかもしれない。

案外簡単に片付く事件かもしれないかった。

だが、既に二週間が経過している。

それに、店の裏口で殺されていたのも解せない。

どうも釈然としない。そんな簡単な事件なのだろうか。当然警察も藍の私生活は調べているはずだった。愛人がいて、愛憎のもつれから愛人が殺したとしたら、とつくに犯人が捕まっていなくてもいいはずだった。

「まだ犯人は捕まっていないらしいですよ」

森笠の言葉が半鐘のように神崎の脳裡を駆け巡る。

この事件には、もっと奥深い何かがある・・・？

再び三田村の顔が頭を掠めた。

痴情の纏れ・・・？

こういうストーリーはどうだろうか？

三田村と藍はつきあっていた。三田村が藍の存在を神崎に隠していたことは置いておくとして、だが、神崎の出現で、藍は神崎に惹かれ始めた。

三田村としては、単に自分の女を取られるだけでなく、取っていく相手が親友だったことから激怒し口論となる。

その果てに藍を殺害した・・・

いや、それは無理がある。三田村と藍が闇に消えたのが月曜日、藍が殺されたのは水曜日の深夜である。この時間差は、痴情の纏れにしては時間が空き過ぎている。

三田村ではないのか。

神崎は、バーボンを一口すすって、携帯電話を取り出した。とにかく三田村に連絡を取ろう。

頭のどこかで三田村を犯人に仕立て上げようとしている自分がい

た。

三田村が犯人だったらいいと思っているのか・・・？

そんなことはない、とはっきり言い切れない自分がそこにいた。とにかく三田村だ。あいつと話そう。

登録履歴から三田村を選択しようとマ行の画面を送っていたとき、ふと指が止まった。

松岡賢一郎。そうか、彼がいた！

松岡も神崎の友人のひとりだった。三田村ほど親しいつきあいはしていなかったが、知り合ってからのつきあいは松岡の方が長い。彼を呼び出そう。

松岡は新聞社に勤めている。今回の事件を知らないわけがない。情報も、警察ほどじゃないにしても、神崎より詳しいものを持っているに違いない。

三田村を直接呼び出す前に、少し事件の情報と進捗状況を知っておくのも悪くない。

神崎は松岡の携帯番号を発信していた。

【続く】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0262w/>

プリズムレイン

2011年10月10日11時04分発行